明治廿六年七月五日發行

女鑑

第四十二號

東京國光社

女鑑第四十二號目次

果安之妻



女鑑 第四十二號

女鑑

女流の文學

我が邦、古、文學の上に於いて、女流の功、與かりて大なるものあるは、世の人の、既、諒知せらるゝところにして、紫式部、清少納言を始とし、許多の才媛出でゝ、國文の粹美を發揚せられたり。夫、古の女流の、此の如くなるを知らば、又、後の女流の、此の如くならざるを知らんや。吾人の、女流に望むところは、是が爲のみ。

抑、文學の理論は、之を、古に比して、頗、發達したりと雖、其の著作の、能く古に階して昇るべからざる低地に在るは何ぞや。文學は美に屬し、情を發揮する

ものなり。今の世は、古の世に比して、智の進みたると共に、情も、亦、進みたり。即、利慾、利己の念は、古の比にあらざるべく、上古の、專、天變を畏れ、地妖を怖れ、其の他、人事の變を悲み、之を避くる智に乏しく、只管、號泣して、之を免れんことを哀求したるが如き時と、今日とは、大に異ならざるを得ざるなり。今日の人は、古の人に比し、猜忌、復仇等の念、大に消滅し、室家和樂し、邦人相親しむ公情を發揮せること、之を中古に比するも、亦、甚、逕庭ありといふべし。されば、今日の詩歌詞曲の如き、又、大に、昔日のものに比し、人情に近く、美學の旨趣に合ひたるもの多かるべき筈なるも、文學を學ぶものゝ、惰慢無氣力にして、只管、昔の人の意をも語をも踏襲することを、これ求めて、毫も、自家獨得の技能、感情を發揮せざるによること、申すまでもなく、此の世と

共に進みたる文人の出でざるに坐すること、是なり。
歌につき、之をいはんに、万葉以下、代々の撰集、名匠巨擘、千百を以て數へらる。其の玉吟金篇の多きこと、固より、論なしと雖、萬葉の、特に、秀でゝめでたしといふものは、人麿、赤人などの聖あるが爲なりとはいへ、當時は、我が邦の一部（關東北國は、尚、文運開けず。）に於いて、其の人、其の國、實に、發達を極めたる時にして、加之、其の歌篇は、往々、當時の人情と密接するものを出だし、又、五倫上、同愛の意、盛なるものあるにもよること、明かにして、後世に至りては、上古ありがちの畏怖的、利己的のことなしと雖、之に引き易へ、專、人情を外にし、人事を解脱して、只管、月雪花にのみ、耽りゆきたるものなるが故に、之を讀むものをして、同情を表さしむるに由なく、一二の世に失望し

たるものをして、假に、こゝに托せしむるのみ。畢竟、萬葉の歌は、熱情より成るものの多ければ、後世、熱情のもの、之を讀みて、同感を表し、他は然らざる故ならん。

今の世は如何。佛教小乘的の遁逸主義衰へて、世は明治中興の活世界なり。政權は、鎌倉以來の覇府を倒して、赫々王室に比し、宮廷は、賢才異能の士、門葉によらず、拔擢せられて、其の位に攀づることを得。かしこくも、神武の帝の、御創業の氣象といふべし。かゝることなれば、今の大宮人は、『櫻かざして今日も暮らしつ』の閑散にはあらざるなり。されば、今日の歌人たるもの、又、昔日の歌人たるべからずして、今日中興時代の人の情思に適ひたるものならざるべからず。

歌は訴ふるなり。情を叙ぶるなり。美文の中にて、最、區域狹きものなり。美文の中に、情を叙ぶるものと、事を記せるものと、情と事とを幷せて記せるものあり。專、情を叙ぶるものは、其の辭も、簡にして盡くすべし。短歌のみ行はれて、長歌の衰へたるもの、これによるならんか。萬葉の歌、聖の諸作には、記事のものあり。情、景、幷せ寫せるものあり。而して、後の世には、之なきなり。」然れども、古の情、景、幷せ記せるものにては、之を讀むものをして、作者を經て、篇中の人と接する憾ありて、之を讀みて、直に篇中の人に對するが如くなる能はざるなり。其は、院本の、獨、能くするところにして、東西文學の粹は、院本にありといふもの、こゝによるならん。

今日、理學大に進み、事物を記せるに於いて、怪異の意ほろびて、理學により

て、事の眞相を看破して、之を評叙し、又、心理學、哲學の、大に開けたることなれば、人を寫すに於いても、其の心性を解剖し、活くるが如くならしむ。これ、詩歌文藝の、大に變化進歩すべき時にして、我が邦の國文をして、巧に、この新營養物を消化せしめたらんには、其の美たる、蓋、いふべからざるものとなりなん。

嗚呼、今日は、文運の、方に會せんとする時にして、國文を中心とし、主人として、この大氣運を旋らすべき時なり。古の女流の、我が邦文學の柱石たりしことを思はゞ、願はくは、今日の女流にも、かゝる賢才を出だして、御國の光を添へ賜へ。あなかしこ。

論説

婦女を鞭うつもの

櫻剛彦

婆羅門の敎典に、婦女を鞭うつものは、花枝を以てするも不可なりと。海山の隩、窮陲の境、君あり、師あるところ、いづれか弱を侮ることの不可なるを唱へざるものやはある。只彼の孔子敎に於いては、一言の婦女を待つ道に及ぶなきは、奇といふべし。

東方神聖の邦たる、我が大倭國に在りては、婦女を侮らざる道、敎を待たずして備はれるものゝ如し。然れば、御兄弟の親を以ても、尚、素盞雄尊の遠謫せられ給へるが如き、倫道に於いて、固より然りと雖も、又以て古來の風尙を觀る

べきなり。蓋婦女を以て、一種の財産視したるが如き、他邦のよく有るところなりしと雖も、我が邦に於いては、後世戰國の時に至り、妻女を質にして、以て信を敵國反邦に結びたるものあるを始めとし、德川氏の、諸侯の夫人を江戸に留めて、以て政略の具となしたるが如きは、もと、みな爭鬪殺伐世界の出來事にして、眞成の御國ぶりには非ざるなり。

大戰爭の後には、人心みな豪壯の狀をなし、禮儀の地に落ち、道德の廢ることあるは、勢の免れざるところなり。況んや戊辰の戰は、革新の氣運に促され、中興の運を啓きたるものなれば、乱の平ぐや、この世の綱紀ともいふべき倫理、道德、尽く其の跡をとゞめず。勝利を得たる兵士、武人、其の意を縱にして、まゝ酒を縱にし、色を漁し、花を折り、柳に攀づることありき。これ又一時婦女の淩

辱せられたる時とす。然れども、是又一時の變象に過ぎざれば、再び倫理の世、禮讓の邦となりて、婦女の地位安固となるべきは、理勢固に然りとす。然るに、この一時の變象に驚かされて、男女同權等の反抗說を唱ふるは、頗る當を得ざるものにして、宜しく其の變を去りて、平靜に歸するを待つべきのみ。我が大倭國は、古より、婦女を侮り辱しむるが如き、强を賴む心根に非ず。大和心といふものは、極めて優美和易なるものにして、大和心とは情をいふなり。之を意志を指す如くに解釋したるは、封建武斷時代の謬想のみ。『神ながら言擧げせぬ國』とは、何ぞや。意志をこれ貴ぶ賢しら人を斥けたるは、万葉集中の古歌に見るも歷然たり。情を以て相推し、相和するは、眞の國風なり。同權、非同權など、理窟に陷るは、みな祖宗の遺風に非ざるなり。儒敎に偏したる敎、又は武門政治以

後の弊は共に退くべく、之をして、宜しく中古以上に復らしむべきことにころ。

女子要言　第二篇（十四）

三輪田眞佐子

第三　挿花。人は、一饋に十度起つ繁もあらん。晝夜安眠する能はざる忙もあらん。然れども、亦時として、安息すべき祝日、休暇もあらん。よしや、あらざるとするも、鐵腸の梅花、温良の水仙、床上にあり、机上にあるは、自然、人をして、繁忙の間、尚綽々たる閑日月ある、所謂高尚の生活をなすものなり。而して、凡俗を離るゝこと遠ければ、人をして欽慕せしむるのみならず、己も自然雅致に感化され、家を清潔に整理し、道德上、及び衛生上にも、亦關係あるものなり。是を以てか、歐米の家政等にも、各盆栽を、室内に備ふることを教へさ

るなし。然れども、我が國には、唯盆栽のみならず、一道進んで、挿花の道、夙に存し、其の流派に、遠州、池の坊等、種々あり。蓋此等は、悉く一の標準なく、徒に先人の始めしものにあらず。乃ち花木を天地人の三才に典り、以て宇内自然の理勢に從へり。其の多少、截斷折曲せしむるものは、其の理勢に背かしめざらんが為なり。以て性善の人、偶邪惡に染まんとするを、教育するに等しきを知る。然るに、世の此の道を學ぶもの、此の理を察せず、唯左に屈し、右に撓め、遊惰に歳月を費す因と信ずるものなきにしもあらず。故に一瓶の花を挿むに、半日の時間を過ごし、遂に親夫の厭ふ處となり、甚しきは、床板に塵積もる一寸に近く、而して其の上に、金色の花瓶を置く如きは、挿花の効力を知らさるものなり。要するに、挿花の目的たるや、後園の菊一株を、瓶に挿むも、天然

の理勢に從うて麗しく、且家業の妨害とならざる樣、機敏にして、以て來賓、及び家族に、挿花の效德を受けしめ、且女子の手は、何となく、一家に佳調の光景を與ふるもの哉と悦ばしめざるべからず。

第四　茶道。　此の道は、遠く應仁年間に、唐制に基き、粗暴なる武臣の動作を矯めんとて、始めしものなり。就中、將軍義滿、義政、尤之を好み、次で天正年間、千利休居士が、禪道を學び、僻地に隱遁し、月に詠じ、花に歌ふ傍、有合の茶碗や、曲形の茶壜を以て、茶を喫し、清貧風流の樂をなせり。然るに、當時の諸侯、之を聞きて慕ふもの、續々居士を訪ひ、之を學べり。茲に於いて、茶道行はる。其の他に宗旦あり。其の后、片桐石見守貞昌、小堀遠江守政一等、各其の流派を開けり。而して吾の諸孃に勸むるも、必竟、其等先輩の流派中、其の好む

處に從うて、聊心得べしと云ふにあり。而して之に附して云はんと欲するものは、茶道の應用にあり。思ふに、此の道を學ぶ利益は、曰はく謹愼、曰はく風流、曰はく親睦、曰はく尊敬等あり。故に之を有益に用うれば、平常、客に茶を進むるにも、茶碗を倒し、或は溢るゝ如くせざる習慣をなし、就中、爐の灰を漉し、炭を扱ふ抔も、平常の火箱等に應用すべし。世徒に、此の道を空禮と誹るものあり。故に、之を一言辨せん。抑も劇務正に疲れて、時に暇を得る日、知己相集まり、茶を點ずるは、高尙の風儀をなすに外ならず。而して其の一碗の茶を、數人にして呑むは、相親む基なり。其の茶主の器具を賞むるは、敬禮の意に過ぎず。實に茶道は、女子の學ぶべき興味あることなり。何ぞ空禮と言はんや。然れども、若其の目的を過たんか、其の僻する所、彼の骨董的の茶器を愛し、露たに

なき世辭を云ひ、寧失敬の儀式をなすに至らん。故に吾は、女子の、此の道を學ぶは、家族の膳部に對し、來賓に接して、粗末なる擧動を爲さゞる爲、平素より、嚴肅なる、其の道の一端を心得べきことを祈るなり。試に問はん。彼の徒に、茶杓、及び爐の灰までを口舌にて譽め、虛飾の諛を受くるは、遺憾と思はざるか。反之、茶道を學びしものと、外觀に顯るゝなきも、沈着の習慣、滿腔の盛德、不知不識、心ある人に認めらるゝは、美の至には非ざるか。宜しく思繹すべし。

第五．畵。自然の光景は、美なり。妙なり。見よ、竹葉に粧ふ雪、溪に流るゝ水、及び山を繞る雲の如く、宇内の萬象、一として目奪はれ、心動き、恍惚として、覺えず歎賞するに至らさるものなし。而して此の光景を、一幅の絹紙に寫すもの、之を畵といふ。故に畵は、單に其の事實を寫すのみならず、尙不形の美妙

をも含畜せしめざるべからず。瀧澤馬琴曰はく、畫は、文字の餘韻あるものなりと。蓋此の意に近し。故に、女子にして之を學ばゞ、大に雅致の心を涵養し、從うて高尚の風となるべし。是を以て、畫を學ぶも、決して無益にあらず。加之心を綿密にし、且考を深遠ならしむるものなりと云ふを得べし。例之ば、花を踏で逍遙せば、馬蹄芳との畫題も、畫の如何たるを知らさる人は、如何にして、其の意味を表すやに迷ふならん。然れども、畫人は、之を表すに、蝶飛で、馬の跡を逐ふを以てし、野水濟る人なく、孤舟終日橫はるとの意を畫くに、蘆の間に見ゆる楫柄の頭に、鷺の止まるを以てするとかや。實に高趣ある樂ならずや。然れば、女子春日の徒然に、花骨牌を弄び、秋天の寂莫より、不善の思ある時、筆を飛はして蘭を畫き、墨を留めて山を寫し、以て不識の間に、家族を高尚に導く、

亦快ならずや。

以上は優美の藝の主なるものにして、類推すべきものは、別に掲げざりき。夫論じて茲に至らば、或は曰はん。女藝は、上述の如く、實用、及び優美の數項を知らば盡くせるかと。吾は、之に答ふる必要あるを信ずるなり。思ふに、此等數件は、一個の阿孃として、妻君として、必知らざるべからざる中庸の標準にして、女子の目的は、家政の長たり、人の妻たり、且母たるものなれば、斯々せざるべからずと云ふ意なり。從うて、其の位置と境遇に應じて、其の内一二を省き、或は別に一二を加へ得べきなり。殊に忘るべからざるは、女子外事を職とし、反て男子をして、味噌を製し、糸を續がしむるは、背理の甚しきものなり。亦外事の爲、兒子を愛育する機會を失ふは、事の宜しきを得たるものにあらず。或は、

己の目的を果さんため、一生孤獨となるに至るは不幸なり。且分外に精神を勞し、身体を疲らし、遂に病痾を買ふは、尙非なり。然れば女子は、飽くまで上述の女藝を學び、且行ふを以て、原則とせざるべからず。既に原則あらば、玆に例外あるは自然なり。而して玆に云ふ例外とは、女子にして、特別の事情、及び理勢あるものは、上述の女藝の外にして、然も女性に適合する藝能に限り、從事するも、一部の女子には妨なかるべしといふにあり。併一般の女子に望む處にあらず。何となれば、其れが爲、孤獨の女子を見るに至る恐あればなり。

史談

民直果安が妻

三木五百枝

昔、青土よし、奈良の大宮に、大八州國治看しゝ、日本根子天津御代豐國成姫天皇(後の御諡號を元明天皇と申し奉る)の大御代、大倭國有智郡の里人に、四比信紗といふ女ありけり。その頃、同じ里の内にやありけむ、民直果安といふ男ありけり。この男、父母はありけれど、いまだ家事取賄はすべき者なかりければ、人して請はせてか、自ら乞ひてにか、その親の許を得て、信紗を娶りてけり。妻も、よく夫に事へけむ。夫も、なべてならず、妻を勞はりけむ。妹妋の中らひ、いと〳〵睦まじくて、子供數多を生みけり。世の中に、數多の子持てる婦を見るに、その愛に溺るゝにや、子をのみ、一向に愛がりて、己が父母をばおろそかにはすなり。信紗は、嫁入り來しものなり。なべての有様にていはゞ、數多の子にひかれて、舅姑には、自ら疎よなるべき事なり。さるに信紗は、疎にするなどは更なり、露ばかりも、その意に違はで、朝夕敬ひ事へてけり。舅姑も、まことにうれしと思ひて、近隣の人などに、その孝なる行を打出しけむ。また親しき友どちは、目前、その狀を見て、人にも語りけむ。村より郷、郷より郡、郡より國とやうに、つぎ〳〵に語傳へて、遂には、世に隱れなきものとなりにけり。かゝれば、一家擧りて、睦び親みてありけむを、

あだなる浮世こそ悲しけれ。花盛りになりなむとして、夜半の嵐に、はかなく散り、月明かになりなむとして、叢雲の立籠ふらむことの如く、夫果安は、假初の疾より、やゝ重りゆき、漸々積りて、遂に、この類まれなる愛妻を、現世に遺してなむ、身罷りにける。尋常の女だに、夫の病よ罹らむには、心の限、力の極、看護せむものを。これはいかばかりにかしけむ。人の心、おほらかなる世の事なれど、委しく記し留めざりしは、いと口惜しけれど、なか〳〵に、その心根の思遣れて痛ましうなむ。果安に妾ありしが、それにも子數多ありき。その子ども、また家に養はれけるが、今は遺子とぞなりにける。

近に親み、遠に疎くなり行くは、人の世の常にこそ。されば、幸なくて、早く夫に別れし婦など、その始こそ、朝夕、ありし世の事偲出でゝ、花手向け、阿伽酌みつゝ、昔の如くに仕へ、袂の涙かわく時のあらざらめ。日去り、月立ち、年改まりゆくまに〳〵、自ら疎ずといふにはあらねど、始の如く、切に念はで、やう〳〵に、現世心になりゆき、中には、轉てき名をさへ、人に歌はるゝもぞあなる、年若はことに然り。

痛ましきかも、信紗。哀なるかも、この寡婦。舅姑も、いまだ世にありしを見れバ、齢とて、さまで老いたるにはあらざりけらし。數多の子供ありきと聞けバ、末のなどは、幼もありけらし。去か齢若かる程にてこそ、夫に別れつれ、世の人には似ず、幾年の春秋を送迎へても、塵バかりも、夫の亡靈に仕ふる道を疎にせずといへバ、忌日〱に、愼み侍らふさま、さこそ在すが如くには去つらめ。その志、すでに哀なるに、妾の子と、自が生める子と、惣て八人ありしを、撫養ふさま、少かの分隔もなく、他目には、皆がら信紗の子と見えけれバ、委しく聞きては、尊くもありけりとぞ。

世に繼母根性とて、己が生まぬ子をバ、あはめ惡み、死ねかしとさへ思ふ者無きにあらず。さる類は、もとより人として見るべきにあらねど、熟〱思ふに、多くは、己が生める子、愛しとおもふ心の、はやり過ぎて、闇路に迷ふなりけり。そは先妻の子などありぬとも、己が子生まざらむかぎりは、心も鬼にならぬにて知りうべし。いかに、人の親の心は、子故迷ふものなりとはいへ、いと悲しき事になむ。繼子なりとて、夫の胤、我が生みたるとて、夫の胤、胤にかはりのあらざるのみか、わが養

子として、育しゆかバ、いづれかわが子にあらざらむ。この理いとやすげなるを、學道たど〳〵しからぬ人も、ともすれバ、迷ふなるは、自を愼むことの足らぬにやあらむ。夫を思ふ心の深からぬにやあらむ。あはれ、信紗。物學はありしか、無りしか、そは詳ならねど、人の道を知りたるぞ尊きや。

妾の子、わが子、合せて八人、夫の壯健よてありなむにも、ろを養育むことは、おばろけの事にあらず。今は夫もあらずなりぬ。信紗の辛勞おしはかりつべし。それすらあるに、舅姑も世に在るなり。それをも、いかでか疎にすべき。また夫のありし世にかはらで、いつきかしづきけり。さらぬだに、信紗の行を、世の人、見賞で聞めでゝありたりしに、夫の世を去りてよりは、その行、一層立勝りければ、あなあはれ、あないみじと嘆むる聲、雷の如くにぞ鳴渡りける。時の　天皇は、手弱女にてこそおはしましつれ。御心おきて、世の常ならず、夙に忠孝の道を勵まし給ひ、有司に命せごとありて、雲のぼる高山の末より、浪寄する岩根の邊に至るまでも、海人山賤の隔なく、行ある者を求めしめ給ひぬ。信紗、いかでかその御惠に洩れむ。忽ちに、雲の上まで聞えければ、詔を下し給ひ、その孝義を旌はさむとて、終身

の事を免させ給ひてけり。時にこれ、武藏の國より、和銅を獻れるによりて、年號を改め給ひしより、七年を經たる、十一月の四日になんありける。

今式部のおもと　遠山操

先妣山田氏繼子は、丹州桑田郡千年鄕中村の產、一匯軒山田道夢居士の四女なり、居士は連歌を好みて、秀逸の句おほく、愛太子山の興意法師、宇都谷の圓立法師などと、名をひとしうせられたり、山田氏記臆つよき生まれつきにて、居士のかたはらにならひて、古歌三千首ばかり、諳におぼえ給へば、幸に歌よむ事を敎へて、寬永の女帝明正天皇の、おりゐさせ給ふ仙洞に、ゆかりの女房のさぶらはれたるによせて、宮つかへの心よういに過ごされけるこそ、先考朴翁の嫡母河合氏、そのかたち心さまのうるはしく、裁縫にさとく、手かき歌よむかたにさへ、まめなるよし傳へきゝて、わりなく乞ひむかへつゝ、二十歳の時、先考に配せられたり、先考もとより、歌連歌けいこのをりふし、志わひかなひて、いともむつましく、督子、爲實、爲章、久子、うちつゞき產生ありけり、よのつね、かの仙院にも、東福門院明正天皇の御母の御所、或

は好君の御方（伏見宮御息所）のなど、何くれの御遊にも參りなれて、うち〳〵御歌あそばさるるけはひ、つたなからざりしかば、今式部のおもとゝ召しはやさせ給ひけり、嗚呼かなしきかな、生縁かぎりありて、寛文八年戊申正月十一日の夜、病の床にかくれ給ひぬ、時に三十九歳、遺骸は東山眞如堂の葬地にをさめ、法號は淨心院霞屋妙仲眞尼と申し、位牌をすなはち玉藏院に安置し侍りぬ、其の折の戒師には、北野西雲寺の開山、見性坊阿闍梨きたられしが、その弟子智玄律師は、もとより殊勝の念佛者にて、俗縁も近かりければ、側にそひゐて、淨土の法文をしへ聞こえられしに、かぎりとおぼえて、唱名も止みければ、いづこへとてかおはす、今しばらく念佛したまへと、高やかに呼びかけられし時、目をひらき見あげて、

あらざらん此の世の外のすみ所もとめにをとてにしにこそゆけ

とばかりありて、事きれ給ひぬ、叔父定賀、姉督子など、つどひ居られしかば、たしかに聞きとりて、やがて書付けおかれたり、後に中院内府通茂公きゝ給ひて、和泉式部が句と、伊勢物語の言葉と、いかに口なれ耳ふるしても、今はの病苦しきりなる中に、てにをはをもたがへず、かくつらねられしは、奇特のためしなるべし、

これも年頭、この道すきの冥加なりとて、かへす〴〵稱歎まし〳〵けり、家兄爲實、すぎし頃、平生の歌の殘れるを拾ひて、一集となし、通茂公へ見せ申されければ、奥書をかき加へ給へり、

此集上下卷、山田氏龜子、法號淨心院霞屋妙仲眞尼所詠和歌也、眞尼從少好歌、暗記三代集、讀源氏狹衣等、曾侍于本院、仙院被召、今式部局、長子右兵衛尉爲實、編纂此集、請於題名予、曰彼仙院賜稱、可謂後代美談也、因名今式部家集云、

延寶乙卯季春　　通茂

集にもれたる歌九首は、本院小督の局の尼にありて、北野におはしたるがもとに、自筆もち給へるをこひ得て、こゝにうつす、

澤若菜

春はまだあさ澤水のうすこほりとくる日かげにわかなをぞつむ

月前梅

かすむ夜の月をあはれむ袖の上にをりしもさそふかせの梅が香

ほとゝぎす

夕づくよかげはのかなる雲まよりさやかになのる山ほとゝぎす

雨後蟬

夕だちのすぐれむやがてなくせみの聲もすゞしきもりの下かげ

八月十五夜

名にしおふ月のかつらの下風に拂ひ殘せるうきくもゝなし

こよひしもからにやまとによむ歌のこゝろ〲を月にとはゞや

秋夕

あはれをもおもひたどらぬ夕さへそこはかとなく秋ぞかなしき

忍戀

此まゝにたへてしのぶの森のつゆ消えははつともいろにいでめや

夜をつらねて待戀

たのめつゝこぬよあまたのいつはりにこりぬ心ぞ我ながらうき

以上は、本院の御前にて、當座々々によみたまへるものなるよし、さて、右は、年山安藤爲章が書けるものにて、千年山集及び年山紀聞にのせられたるを、其

のまゝうつして、女鑑の紙上をかりて、孃等に志めしまゐらするなり、嗚呼孃等、ゆきに螢に、いそしみはげみて、この山田氏の如く、式部のおもとゝ、稱歎せられんことをはかり給へ、然れども、歌よみ文かくわざにのみ、心を入れて、女のまさにつとむべき裁縫料理の事をな、おろそかに志給ひそ、

家政

看護法捷徑（十九）

第二編　治療の輔助（つゞき）

三笠舍主人

（十一）吸角用法

一吸角とは、楕圓形にして底の方は稍廣く、首の方は少し狹くして、直に口と爲りゐる硝子器にて、其大さ拳子大より、稍小也、鬱血、又は拘攣、又は深部の焮衝等に、皮膚に貼用して、病氣を緩解する効あるもの也、

二吸角を用ゐるに、二法あり、一を乾角法と言ひ、一を血角法と云、甲は單に吸角

のみを貼する法にて、先吸角を數秒時間、酒精燈火の上にかざすか、又は一二滴の酒精、若くは「エーテル」を器内に滴し、振盪して餘分の酒精を傾け去り、之に火を點ずれバ、器壁に着きゐる酒精焚ゆるなり、其焚るに乘して、其儘器械の口を皮膚に貼すれバ、(皮膚に貼すると同時に、焚火は自然に消るなり、時として、酒精の器内に遺る事多き時は、爲に少く皮膚を火傷する事有り、酒精を十分に傾瀉し置けバ、此等の患ひ決して無し、)器内の空氣驅逐せられゐる故に、皮膚に緊着し、其近傍の血液を皮表に吸ひ取り、皮膚は見るまに膨れて、血液充漲して、赤色を呈するなり、十分に血液充漲するを度として、吸角を去るべし、

三　血角法は、瀉血器と名付る器械を用ゐて、皮膚に數條の淺き截痕を作り、(撥條の作用にて、截痕を作るものにて、瞬間に終り、殆ど痛を覺るものに非ず、)快手に前方を以て、吸角を其截痕の上に貼する時は、血液吸取られて、器中に溜るなり、(恰も水蛭と同じ効用を爲す、只此法は暫時にして、多量の血を吸取るを得)此く血液器内に充るを俟て、器械を去り、石鹼水を綿に浸して、跡を拭ひ清め、更に石炭酸水に浸せる布片を貼するなり、取るべき血液の量、及其部位は、醫士の命に

依るべし、
四吸角を除去るには、粗暴に引放すべからず、先吸角を上より撮み、兼て示指頭を少し曲げて、皮膚と吸角の縁との間に挿み入るゝ如く爲す時は、容易く脱去るを得るなり、

（十二）水蛭用法

一水蛭を貼するには、先一二時間水中に放ち置時は、(冬なれバ少し微温と爲すべし)能く吮吸するなり、又麥酒、若くは酢と水との混和液中に、暫時放ち置く時は、多量の血を吮吸す、(吮吸し難き時、此くすれバ、亦吸着き易し)
二水蛭を貼するには、先病者の姿勢を適宜にして後、患部を裸にし、他の部は凡て布片を被ひて、衣襟の汚染を防ぎ、患部に毛髮あれバ剃り除き、温湯にて洗ひ、十分に其部を摩擦して、赤色を發せしめて後に、貼すべし、若し吮着ざる時は、數滴の乳汁、糖水、麥酒、又は他部の血液を一二滴取りて、患部に塗りて貼すべし、
三二三條の水蛭を貼するには、布若くは紙にて、虫身を包み、其尾の方(細く尖りた

る方頭にて、尾の方は稍大なり）を撮みて、吸着かしむ、或は厚紙等を巻きて管狀と爲し、又は水蛭管と稱する小なる管に容れて、貼するも可なり、若し數十條を一所に貼する時は、吸角、又は硝子の盞に入れて、患部を覆ふべし、其外鼻內、口內、等に貼するには、長き糸にて、虫の尾端を縛り、深部に這入る時に、引出す用と爲すべし、

四 水蛭は、飽吮して自ら脫落するを俟つべし、されども、病者爲に眩暈等を興す時、又は醫士の定めたる時間を過ぎても、猶脫去せざる等の時は、少許の食塩を虫身に撒布するか、又は煙草にて薰する時は、直に脫落するもの也、決して粗暴に引放すべからず、

五 水蛭脫落したる後は、石炭酸水に浸せる綿にて其部を拭ひ、流血止むを俟て、更に新らしき石炭酸綿を被ひて、輕く繃帶すべし、出血久しく止まざる時は、冷水又は明礬水を注ぐべし、若し三十分時間を經るも、猶止血せざる時は、醫士に報告すべし、

若し脫落後、猶續て出血を要する時は、温湯にて奄法を施すか、若くは患部を温

湯中に漬す時は、出血猶續くもの也、

六水蛭を貼すべき部位と、其數とは、醫士の命に依るべしと雖、通常皮下に大なる動脈、(脉搏あるもの)靜脈(青色に透見して、搏動なきもの)のある部は、必ず避くべし、

料理法增補(五)

待月莽

全じく

向附　鱚魚、紫蘇、松葉藻、山葵、

汁　いはたけ、蓴菜、

椀もり　煎海鼠、せんば玉子、隱元、

燒物　小鯛、雲丹燒、

吸物　さく地のり、

八寸　蠣にしめ、山の芋、

全じく

向附　鰺作り身、はすいもせん、いはたけ、
汁　小茄子、青しそ　ゆびき、黒胡麻澤山、
椀もり　鱸、粒しひたけ、はすいも、
燒もの　青鷺、
吸物　はら丶子、
八寸　新まるいも、海老、
仝じく
向附　鱒紙しは、きすご笹作り、おろし瓜、たで、海苔、
汁　ゆで、いはたけ、
椀もり　鰒やはらか煮、燒百合、隱げん、
燒もの　魴魚、
吸物　きく地のり、
八寸　粒推茸、魚せんべい　火とりて、
仝じく

向附　鯛の昆布ずし、海そうめん、松菜、
　汁　牛蒡、さゝかき、小茄子、
椀もり　鱸、せんまい、巻ゆば、せんば玉子 糸、青昆布 たんざく三枚、
　焼もの　鱒志ほやき、
吸物　新小梅 青漬一つ、
　八寸　新生が、にしめ、鮎糟づけ、
　仝じく
附向　鯒わらひ身ほそ作り、くらげ、防風、
　汁　唐瓜、黒豆、青こぶ、
椀もり　さき海老、蓴菜、ゆ葉、
　焼もの　鮎志ほやき、
吸物　鷺しらす、
　八寸　小鮒つけやき、ふちまめ、
仝じく

向附　鱧骨切つけ燒、おろし大根、

汁　いもから、いはたけ、

椀もり　青鷺、すだれ麩、小菜、

燒もの　石餘王魚玄ほやき、

吸物　蜆むき身三つ、

八寸　長いも　つけ燒、煎海鼠、

全じく

向附　鮑、ひじき、みやうが、穗たで、

汁　唐加子角、新葱、

椀もり　鯛切身、新ぎく、子いも、

燒もの　燒鳥、

吸物　梅ぼし一片、

八寸　玉子、實山椒、

學園

本邦女子文學略傳（第六）

目黑和三郎

天暦より降りて、寛和以後、數十年の間は、本邦女子文學の時代にて、この頃輩出せし才女は、その數と共に、前後に比類なき事なり、就中一條天皇の御代を以て、その極點とするなり、十訓抄に、清少納言の事を記せ　條下に曰はく、紫式部、赤染右衛門、和泉式部、小式部内侍、小大君、伊勢大輔、出羽辨、小辨、馬内侍、高内侍、江侍從、新宰相、兵衛内侍、中將などいひて、やさしき女房あまたありけりとあり、これ等の才女は、皆和歌文章に巧みに、又概漢籍のたしなみありしもの也、即當時の才女は、文選、白氏文集など、知らぬものとてはなき有狀なり、故に文學の上にも、殊に光彩を放ちて、光焔萬丈百世を照らせるもの多し、今十訓抄に擧げたる才女、及びその他有名なりしものを撰みて、次々に列記すべし、

○清少納言

○紫　式部

この兩人は、當時才女の內にも、實に鐵中の錚々たるものにて、枕草子、源氏語の如きは、空前絕後の著、後世文範を、この二書にとる位なれバ、二人の價は、推して知るべし、然れども、この二人の來歷性行の如きは、世人皆知り悉くし、又嘗て本紙文學略傳に、難波津淺香の君の述べられし所、詳細なりけれバ、彼に讓りて、此には省く事とすべし、

○赤染衞門

衞門は、大隅守赤染時用の女なり、然れども、實は平兼盛の女なり、（著聞集に、或順女とあるは、いかゞにや）衞門の母、はじめ兼盛に嫁し、懷胎のまゝ離別せられ、時用に再嫁したる也、時用大和守となりしが、はじめは右衞門尉なりける故、赤染衞門と呼べり、衞門幼にして學を好み、長じて當時の碩學大江匡衡の妻となり、御堂關白道長公の室倫子に仕へぬ、（衞門を、上東門院に仕へたりといふ說は、誤りなること、尾崎雅嘉氏の一夕話にいへり、倫子は、上東門院の母なり、）衞門の才學を徵すべき話は、公任の辭表を、匡衡がかけるを、衞門、公任の意思を量りあてたるにあり、十訓抄に曰はく、

四條大納言、寛弘二年の比、月頃うらみのありて、出仕も去給はず、大納言辭退し申さんとせられけるに、匡衡を招て、辭表を奉らんと思問、時英、齊名、以言等に誂へしむといへども、猶心に不叶、貴殿ばかりに書ひらゝれんと思といはれければ、匡衡なまじゐにうけとりて、家に歸りて愁歎の氣色あり、時に赤染衛門、何事ぞとたづぬるに、かゝる事なり、後輩は才學優長也、去かるを、それにまさりて書のべん事、きはめて有がたしと答へければ、赤染打案じて、彼人ゆゝしく嬌飭ある人也、わがみの先祖、やんごとなきものにて有ながら、沈淪の旨をかゝざる歟、早く此旨を書べしと云、匡衡かの輩の草を見るに、實に其趣なし、尤去かるべしとて、打立に云、臣は五代の太政大臣の嫡男也、曩祖忠仁公より以來と云より、次第にかぞへあげて、我身の沈める由を書て持て行所に、感歎して悦べる氣色なり、仍是を用ゐられけり、

いかに機敏なる婦にはあらずや、匡衡の功は、その妻の功なり、かくてこそ、婦人補佐の本分はたつべけれ、かゝる才女なりければ、御堂殿の殿中にては、匡衡の衛門といひて、もてはやしゝよしなり、衛門一男一女を生む、男は擧周とて、和泉守

となり、女は即江侍従是也、衛門また子に慈なり、擧周和泉守の任はてゝ、重病にかゝり、住吉明神の御たゝりなるよし、人々いひければ、衛門は、三首の歌よみて、御幣三本にかきて、彼の社に奉納せり、その感應にや、擧周がさしもの重病、忽愈えけりとなん云ひ傳へたる、世に榮花物語は、この衛門の著なりといへど、年數いたく違ひて判然せず、故にこゝには取らず、衛門卒年詳ならず、又腐徳の所行など、ものに見えねば、終生婦人の徳を全うしたりけんか、

日本文典（承前）

杉谷正隆

第二、名詞の副詞とは、名詞にして、副詞となれる語を云ふ、例へば、「今來ん」、「明日ゆかん」などの、今、明日のごとし、

又、と、にの助辭をそへて、副詞とすることあり、例へば、「花は雪とちる」、「水は蜘手に流る」などの、雪と、蜘手になどの如し、又、時に、日に、月になども云ふ、

第三、代名詞の副詞とは、代名詞にして、副詞となれる語を云ふ、このときは、大かた、にの助辭をそふるなり、例へば、こゝに（此處）、そこに（其處）、かしこに（彼處）、いづ

くに何處などの如し、

第四、作用詞の副詞とは、作用詞にして、副詞となれる語を云ふ、此の時は、第二段連用（下の作用詞活用の圖を見合すべし）の語尾に、ての助辭をそふるなり、例へば、「鳥はとびて行く」、「人は走りて行く」、花はおくれて咲く」などの、とびて、走りて、おくれての如し、又、願はくは、思ふに、打ちつけに、譬へば、云はゞなど、に、は、ぞの助辭をそへても云ふ、

第五、形容詞の副詞とは、形容詞にして、副詞となれる語を云ふ、この時は、第四段連体の語尾よりつゞくなり、例へば、「樂しく思ふ」、「疾くはしる」、「よくわらふ」などの、樂しく、疾く、よくの如し、

第六、熟語の副詞とは、二語以上かさなり、一つの詞となりて、副詞となれる語を云ふ、例へば、元より、何れか、如何でか、一重に、殊更に、身づから、已づから、請ひ願はくはなどの如し、

第四　接續詞

接續詞とは、文章、又は語句の間にありて、上下をむすびあはする語を云ふ、是に

は、其の意味種々ありて、大かた、左の七種とす、

第一　同類のものを、いくつも並べて云ふ意をあらはすもの、例へば、また又、はた将、あるは或、あるひは或、ならびに並などの如し、

第二　有るうへに、又副ふる意をあらはすもの、例へば、かつ且の如し、

第三　上の語句につきて起る意味を説きわくる意をあらはすもの、例へば、ゆゑに故、よりて因、したがひて随などの如し、

第四　上をうけて、下を起す意をあらはすもの、例へば、そも抑、そもそも抑、などの如し、

第五　詞をあらたむる意をあらはすもの、例へば、たゞし但の如し、

第六　前事をうけて、下の意をあらはすもの、例へば、されば然、されど然、しからば然、しかれど然、しかるに然、さるに然、かゝれば斯、かゝるに斯、かゝれど斯などの如し、

第七　上下をひきつらぬる意をあらはすもの、例へば、および及、ついで尋などの如し、

第五　感歎詞

感嘆詞とは、喜怒哀樂のをり〳〵につけて、心に感ずる時に、おのづから發する語を云ふ、例へば、あ（嗚呼）、あゝ（嗚呼）、あら（仝上）、あはれ（仝上）、いで、いざ（俗に云ふさあ、などに同じ）、や、やよ（俗に云ふやあ、などに同じ）などの如し、又、鳥の聲のこう、或は、鐘の音のごんなどの如き、心に感ずるものも、此感嘆詞の中に入るべきなり、

すべて、此感嘆詞は、唯ものごとに感じて、自然に發する音聲にて、一つの詞を成せるものにあらず、故に、体言の中に入るべきにはあらねど、外に入るべきところもなければ、しばらく、此に編入せり、見ん人、咎むる勿れ、

偖、右に說明せる体言の種類を、圖にあらはせば、左の如し、

名詞
- 普通名詞
- 固有名詞
- 抽象名詞
- 數詞
- 異種類の名詞五種

體言
代名詞
人稱代名詞……一人稱、二人稱、三人稱、
指示代名詞……近稱、中稱、遠稱、
疑問代名詞
副詞
本體の副詞……細別して十一種とす、
名詞の副詞
代名詞の副詞
作用詞の副詞
形客詞の副詞
熟語の副詞
接續詞……細別して七種とす、
感嘆詞

漫録

設兒後の婦人（承前）

霧の舎主人

〔第一〕粧飾は、過半廢止するに至る事。　朝夕の身しまひは、婦人の一の職務にて、殊更に脂粉を凝らすは、妓娼の類に陷れど、相應のたしなみはあるべき事なり、既に女は、男の爲に形つくるともいへり、然れども、婦人設兒前にありては、この事いふは、恰も無益なるが如し、何となれど、設兒前にありては、他人の言を待たずて、この事は實行し得ればなり、唯一朝兒子を擧げんか、先にもいへる、一の安心といへる怠りより、俄然に全廢するに至るなり、寐みだれ髮かきつくろふより、齒みがく微細のわざは、大方に、この時より、あとをたちぬべし、抑婦人の、兒子を擧げてよりは、一の職務の、しかも大なるものをます事なれば、強ちに、粧飾の末技をせよとしふるは、得たる論とは、おのれ、固より思はざる也、されども、今の婦人の大方は、唯安心といへる怠惰の上より、粧飾を廢するもの多くて、朝夕の餘暇は、多くありつゝも、猶ねせぬものなればいふなり、一人二人の兒子あげたりとて、髮うち乱し、齒くろばみ、おのが衣るものゝ垢じみたるをも、打すておかんは、婦人の本性もともに見えて、いと見苦し、されど、應分の身たしなみは、設兒後とても、よく注意すべき事とぞおもはるゝは、おのが身のあだ心なりや、

〔第二〕動止に注意せざるに至る事。　こは前とかはる心あるにあらねど、粧飾と動止とは、自

のもの故、かりに第二におきつる也、小笠原流の式を守りて、婦人の動止を縛せよといふに非ねど、障子しきみのもとに腰をりて、引手に手をかけ、音せぬ如く、あけたてしたりけんは、何時の事ぞといはんばかりに、立ながら、はたと音さへたてゝあけたてし、座するに尻を横ざまにし、起つに内股を顯し、歩するに兩足の間いと廣く、勞して足を投げ、疲れて肱を枕にするなど、すべて、動止に心とめずなるも、設兒後婦人に、常に見る事ぞかし、設兒前の謹愼、一時に破れて、その反動まで加りゆくこそ、見苦しとも見苦しけれ、乳兒に乳房ふくむるに、いとしもかきみだして、くづれたらんなどは、せん樣こそなけれといはゞいへ、なほとりつくろひてあらまほし、婦人の容色は、凡て設兒後には、見る影なしと思はしむるは、婦人の罪あるべし、設兒の前後に、さまできはだちたる差異あらんは、あまりに心なき事ぞといふべきなり、

〔第三〕舅姑 良人の奉侍に不敬怠慢を生ずる事。

この第三の箇條の如きは、八項中眼目たるべきものなり、設兒後の婦人の、大過失たるべきもの故、最も注意すべき事ぞ、夏凊 冬温、朝に省み、夕に見舞ふ禮をはじめ、舅姑に對する應答の言詞などに至るまで、すべて疎畧がちになりゆくは、一般のことぞかし、兒を擧ぐると否とに拘らず、この事のみは、終始一徹に出でざるべからざるは、勿論なるのみならず、舅姑は、年々に衰弱に赴くものなれば、年々に注意に注意を加ふ

べきを、兒を設けたるが爲に、年々この注意を疎になしゆくは、實にあるまじき事といふべきなり、舅姑婦に命じて曰はく、云々の事をせよと、婦答へて曰はく、今しも兒に乳のませつゝあり、暫くまたしめ給へ、舅姑命じて曰はく、婦よ云々の事せよと、婦答へて曰はく、今手離しなど、この兒が泣き騷がん、やゝ後には寢入りつべし、それ迄は忍び給はれかし、かゝる事は、設兒後の婦人に、常見る處なり、心から舅姑の奉侍をかくとにはあらざるべけれども、禮に於て、道に於て、欠く所は多し、舅姑に於て然り、まして良人に對しては、その間一種親愛の情ありて、却りて畧儀に失する事多し、畧儀に失する原は、愛情上より來るものなれど、恕すべき事もあれど、さりとては、この一緒より、萬緒生じ來り、はてはなれ／＼て、良人をして、婦の役に當らしめ、かの事なしてよ、此の事なしてよと、おのれは兒を抱きて横に臥しつゝある、その例少からぬ事なり、おのれは、常にこの事見て、さては設兒後の婦人は、從前にはまして、權利てふものも、同時に添ひゆくものなりやと思へる事をり／＼なりき、これ等の事は、餘所目にのみ見苦しきにあらで、道に理に德に禮に背反するもの故、婦人は、もつとも注意に注意を加ふべきことなりといふべし、

（以下次出）

おもひぐさ（つゞき）

藤井行麿

○露ばかりのすひがらより、火いで來て、おほくの屋ども、やけうするためしもあなれど、ふかく、この火の事せいするも、ことわりぞかし、されば、さることにて、常に衣など、やきたゞらし、あるは、たゝみにおとして、しらざるを、人に見つけをしへられて、あわてふためき、ひろひ捨てたる、かたはらいたく、すゞろにをかし、

○朝まだき、霜夜のなごり、いと寒けくて、大かた、かしら、さしいづべくもあらぬに、さゝやかなるわらはべの、らうたげに、うちしばみて、けぶりの調度、持出でつゝ、かきはらひ、きたなきもの、きよむとて、氷うちたゝき、水そゝぎ、かた手ふきく\、石にすりて、かは〱といひたる音さへ、あはれにきこゆ、

○大かた、この調度のもてなしにも、あるじのこころの、おしはからるゝなり、いつも、ちりばみけがれて、火入の灰、きたなげに、きせる、あかづき、とゞこほりがちなるも、にくゝ、さへぞある、きらゝかに、みがきなして、きよげなるは、のむこゝちもよし、かゝりとて、あまり、こゝろを入れて、ちりもいさせじと、もてあがめたるも、これのみにや、くらすらんと、こゝろづきなし、

○火の、いくたびもきえたる、いとむつかし、

○はひふきこぼしたる、あさましさは、えもいはず、

○かくのみ、いみじくいひなすを、いみきらはん人は、それしかあらじ、ようなきものなりと、おもひ捨てなんも、ことわりかな、つく〲と、たゞ

りつゝ思へど、げにはかなく、あだなるものにてこそとも、おもひかへさる、もろこしにても、とりどりに、ことわりて、さだめかねたるとかや、いむ事たゞしき、はふしなどの、近くさしよせだにせぬも、いとたふとし、かくまでは、おもひとれども、猶おきがたきものにや、あしたに起きたるにも、まして物くひたるにも、ぬるにも、大かた、はなるゝをりこそなけれ、かう常に、けぢかく、あたしきものは、なにかなある、さるを、いみじき願立、ものいみなどして、七日、もしは十日など、たち居たらむほどにぞ、常は、さしもおもはぬ、此君の、一日もなくて、えあらぬことをば、あるらんかし、

（をはり）

表章伊勢日記

うづまさ寄贈

（ちうさくあれど、こゝには省きつ）

いづれの御時にかありけん。おほみやすどころと、きこえける御つぼねに、やまとに　おや有ける人、さぶらひけり。おや、いと、かなしうして、をとこなども、あはせざりけるを、御息所の御せうと、年頃、いひわたり給ひけれど、あるじは、さらに、きかざりけるを、いかゞ有けん、思ひつきにけり。おや、いかにいはんど、なげきわたりけるを、年ごろへにけれど、きゝつけてけり。されど、すくせこそは、ありけめとて、ことに、いはざりけり。たゞ、わかき人は、たのみがたき物を　とぞ、いひけるほどに、時のおほいまうち君に、むこに

とられにけり。其をりにぞ、おやも、されバこそ
など、いひければ、女はづかしと思ふほどに、此
男のもとより、人おこせたり。此女の家の、五條
わたりなるに來て、かきの紅葉に、歌をなん、か
きつけゝる。

人すまずあれたる宿をきてみれバ
今ぞ紅葉の錦なりける

女

心うき物から、あはれに、おもはね
けれど、

なみださへ時雨にそひて故郷は
紅葉の色もこさまさりけり

とて、ねずもちの紅葉に、つけてぞ、やりける。

人のこになりぬれば、我を、いまはッ

男、いと、おかしと思ひけり。女、今は、我をば、
よも、とはじと思ひて、やまとへ、く

きて、志ばし、あらんと思ひて、女ガ

だるとて男のもとへやりける。

三輪の山いかにまちみん年ふとも
尋る人もあらじと思へバ

をとこ、返し、

又、あるほどに、心ぼそげに、の玉へれば、いみじく、あは
れになん、尋ぬる人もさあるは、人わろくもガ

もろこしのよしの山にてもるとも

おくれんと思ふ我ならなくにカコ

思はん人に我おくれめや

これを、いさ、あはれと思ひて、かへしなば、ねせで、かく

をとこのもとより、

よみたりけるガ

世をうみのあわと消ぬる身にしあれバ
うらむる事ぞ數まさりける

ならざかのわたりにぞ、おひつきて、おこせたり
けるかへし、

わたつみとたのめし事のあせぬれど

わが身のうらをたれかみるべきゴイはカゴ

我ぞわがみのうらを恨むる

さてぞ、さかおかにて、かへしやりけるカ

やまとに、三月ば
かり、有けるに、さうぐしゝ、寺めぐりせんと

と思ひて、ありきけるに、
て、　りうもんといふ寺に、まうでたりける。正月十一日むかりになん有ける。此寺の有さまは、瀧は、雲の中より、おつるやうになん有ける。仙人の岩やといふ所は、いと、あはれに、年つもりて、岩の上に、苔、やへにむしたり。みるよ、あはれに、たふとく　のみ、おぼえて、なみだは、おつる瀧にも、おとらず、ながむるほ
見しらぬこゝちに、たぐひなく、めでたく見えて、ものがなしく、
どに、さかもとにて、雪かきくらし、降ほどに、
都思ひやられて、いしのもとに、しばし、ながむるに、此寺、い
さ、くらうなりぬ、雨や、ふらむとすらむ、さこもにある人々、
いそぎければ、雨はふらじ、雪などいふほどに、雪さらばかりに
て
人々
いざ、歌よまんといふに、此女、

たちぬはぬきぬきし人もなき物を
何山姫の布さらすらん

と、よみたりけれど、こと人、よまずなりにけり。

今日は、みちに出て、こしといふ所にやどりぬ。
かの寺の、あはれなりしこと、おもひいでゝ、また、
みもはてずそらにきえなで限なく
いとふうきよに身のかへりくる

と、ひとりごちて、そでぬらしたりける。かゝるほどに、かの御息所の御もとより、はや、のぼらせよと、めしたりけれど、はや、のぼり給ひね　宮づかへをこそ、せよと思しかと、思はせていふになん、いぬるこゝちしてける。さて、のぼる道にて、伏見といふ所にて、

名にたてゝふしみの里といふことは
紅葉を床にしけばなりけり

（つゞく）

海野遊翁より香川景樹へおくりし消息ぶみ（承前）　あ、ま

今ひとつ御咄あり、是は先生江戸御出府前に而、いまだ拜顔せざりし時の事故、今を去る事、二十六七年にも相成可申歟、彼御門人の五元上人、江戸より上京ありて立かへりし時、たしか先生五十賀にのぼられし時歟と覺候、其時御祝の咄とて承候うちに、拾遺集貫之御歌「夜ならば月とぞ見ましわがやどの庭しろたへにふれるしら雪と いふ歌、結句を家集に、フリシケルユキとあるぞよき、ふれるしら雪にては不調也、（頴足云、此歌は、後撰集冬よ、はやく出て、よみ人しらずにて、結句ふりつもる雪とあり、此方に、家集に近し、景樹も、遊翁も後撰にある事をわすれていへるなり、後撰にある歌は、古今正義、冬の部の中にといへることあり、）と御物語ありしよし、上人咄され候を、扨々高論をいふ人かな、されど彼名たゝる撰者達の、名におふ拾遺（頴足云、拾遺集は、公任卿撰とも、花山法皇御撰ともいへり、こゝに名たゝる撰者達といへるはいかゞ、）に撰びいれ玉ひけん歌なれバ、いかゞは、さるテツヽナル事有べきと、空に聞過し、其後今をさること十五年計以前、先生拜顔に、かの御物語承りて後、さまゞゝ古人の集どもを見つゝ、中にも貫之集を日日見居りて、聲をつよめ、一首のひゞきをさとりしらんと、となへゝゝてあるうちに、「あまくものよその物とはしりながらめづらしきかな雁の初聲（頴足云、此歌夫木抄に出して、結句雁のさ聲とあり、）とあるを、ふと思ふやう、是はおのれよまんには、初雁の聲とぞよむべき、いかなれば、かりのはつこゑとはよみ玉ひけん、コレニハ深き意味ある事ならんと、其夜明方迄、打もねず、「かりの初聲ゝゝ、又は「初雁の聲ゝゝと、となへゝゝ

てありしに、耳もとにて大鐘にてもつきならされたらんが如く、げにころめづらしきかな雁のはつ聲」ならでは、息こみぬけて、更に一首のヒヾキ不調なりと、夜のあけたらんこゝちに、さとり得たる事ありき、其時今十年以前、彼五元上人、先生之御説とて咄サレシ事を、フト思ひ出で、いかゞどとなへ心見るに、ナルホド拾遺集の「ふれる白雪は」庭しろたへにふれるしら雪」の、にふれるしの處にて、息こみハヅレ、誠に不調ナルコヲ、あきらかにさとりしりぬ、はや其時より、先生は世にぬけ出、此道にとりては、御修行別なる事と、人々にも物語候事に御座候、さて前條二首を、兩樣にふれるしら雪、フリシケル雪、厂の初聲、初雁の聲と書て、江戸の諸先生に見せ候得共、いづれもわしきかたをよしと申人而已故、耳なき事を歎息いたし候、是亦御序御咄におよび候、小子二十四年以前より、天保十二年之今月今日只今に至迄、御文通も不申上、御無沙汰に打過候得共、先生も御老年之御事、百年之後には、たれにかかたるべき人もなく候まゝ、くだらぬ長文、定而ひがごとなるべく恥入候得共、此段得貴意度申上候云云、二白御家集桂園一枝云々御出板、三巻は拜吟熟覽仕候、御詠數多、なかなか古人家集と申も、よきは一向なき物、御家集はぬけ出たる御事に拜聽仕候、但し少は中に申上見たき御歌御座候得共、必定ひが事なるべく候、「海ばらのおきのたかくも見ゆるかないくへつもりし水にか有らんなどは、今打見わたしめにうけ可申處故、ツモ

レルと申たきやう覺候、さても御しらべには、さまでサハリ申間敷やとも覺候、されど、ヒヾキはヤハリりしの方歟、ふと打つけには、れるの方歟と被存候、是は今存出候まゝ、乍御無禮申上候、古人歌集多く候得共、昔よりおし通りて、更に是には少しの論なしと申事は、あるまじくやと被存候、近世眞淵などの集は、ナルホド一向不調なる物に候、これは論なき事に覺候云々、以下略、廣足云、右の書中にいへる如く、先生とか大人とか、いはるるやうになれば、江戸にかぎらず、天下諸國とも、おのれひとり物しりがはして、門下におごり高ぶり、香川氏の歌に勝れたる處をも、かつしりながら、ねたみにくみて、かにかくにいひくだす人おほかるを、かくまことをあらはして、いさゝかも隔てなく、いひ送りたるは、實に海野氏の、此道に志深く、よく其さかひに至れる心にて、みだりに見識を高くする、先生家の類ひにあらざる事、感ずべく賞すべきなり、げにみやびのまじらひは、たれもかくこそ、あらまほしけれ、是につけて、おのれひそかに按ふには、彼拾遺集の歌の、「庭しろたへにふれるしら雪は、にふれるしの所にて、息でみはつれて、不調なるにはあらず、庭しろたへに、といひ下したるは、必ふりしける雪、と受ざれど、ちからぬけて不調なる也、しけるといふ詞にて、「夜ならむ月とぞ見ましといひ、「庭しろたへに、といへる語勢を、シッカリと受たるしらべ也、庭としけるとのかけ合を、よく吟詠してしるべき也、古今名物におなじ貫之ぬし、「ぬばたまのわ

がくろかみやかはるらんかたみの影にふれる志ら雪、（拾遺雜、同、ぬばたまの、わがくろかみにさしくれて、下同）是は、上句より、ゆるらかにいひはなちて、さて鏡の影にとわれば、ふれる志ら雪にて、調よくかなへる也、これをふり志ける雪といふ時は、さらに事の趣にかなはざる也、（白髪の事なれば、ふり志けるさは、もさよりいひがたし、）調不調は、詞つゞきによれるものから、其詞つゞきも、その事情の緩急輕重の勢によりて、かはるものなれど、調不調は、其おもむきの、緩急輕重を志るより速なるはなし、古今、是則、「朝ぼらけあり明の月と見るまでによしのゝ里にふれる志らゆき、千載、經信卿、「朝戸あけて見るぞさびしきかた岡の楢のひろ葉にふれる志らゆき、新勅撰、康資王母、「ふみ見けるよはのあとさへ志るきかな氷の上にふれる志らゆき、これらふり志ける雪と志らぶれば、かへりてあしきなり、（千載、新勅撰のころに至りては、調のなだらかなるをのみ、よしさして、眞の調の力を思ふばかりには、至らぬ歌も多ければ、證さはなしがたきやうなれど、これらは、ふれる志らゆきにて、よく調をなせるなり、まして是則の歌は、いふもさら也、）

（つゞく）

古歌　　稻岡子

都の檀越の妻が、其の夫の旅にあるを思ひつゝりて、

神風の伊勢のはまをぎをりふせて
たびねやすらんあらき濱邊に

と、よめるは、月前に擣衣する婦の、良人遠征をやめん、といへるに比しき感あり。婦たるもの、情、すべてかくあらんかし。

安永八年版　婦女髮樣（承前）

井上賴文寄贈

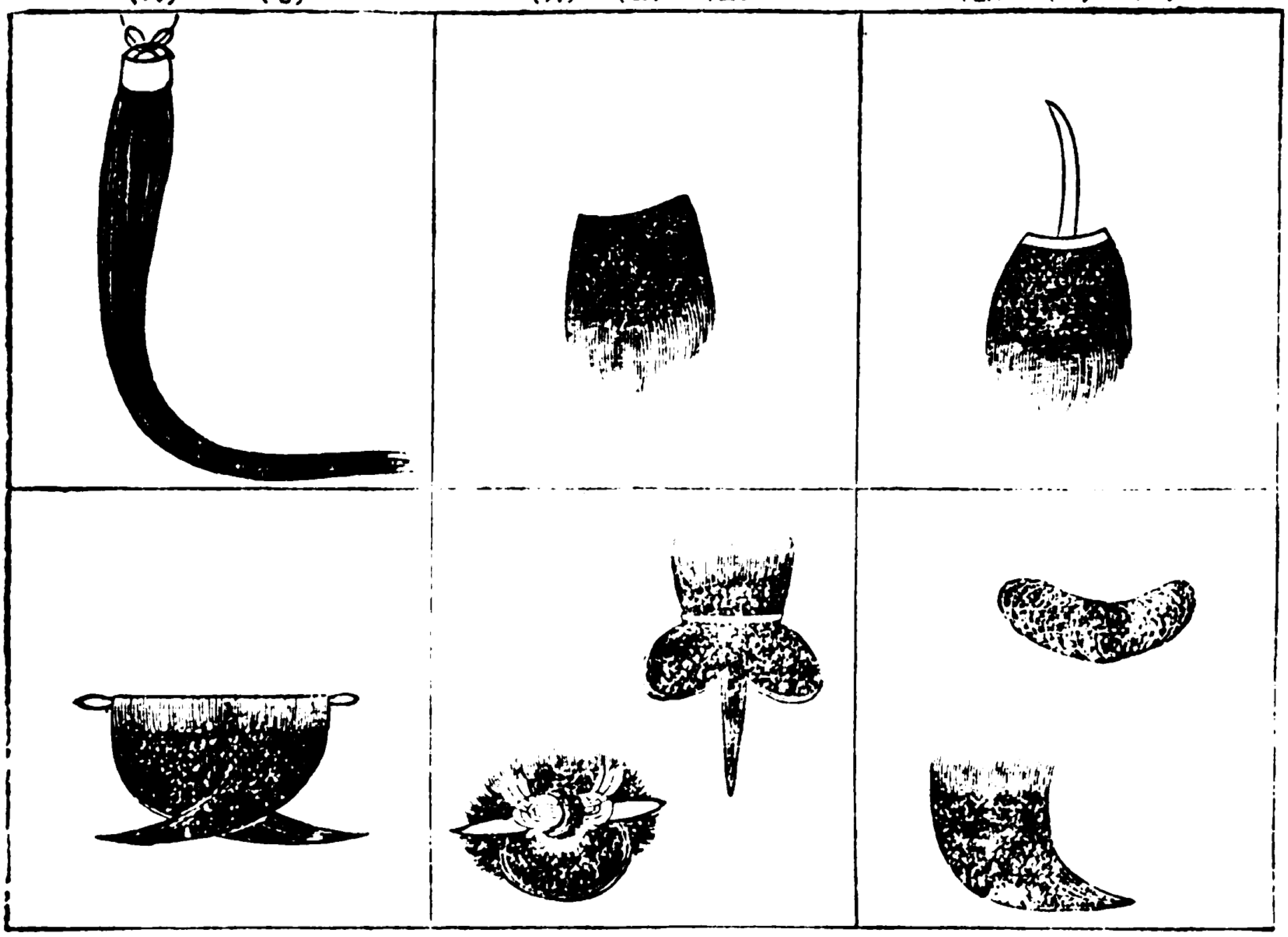


すゞめびん
かりがねつと

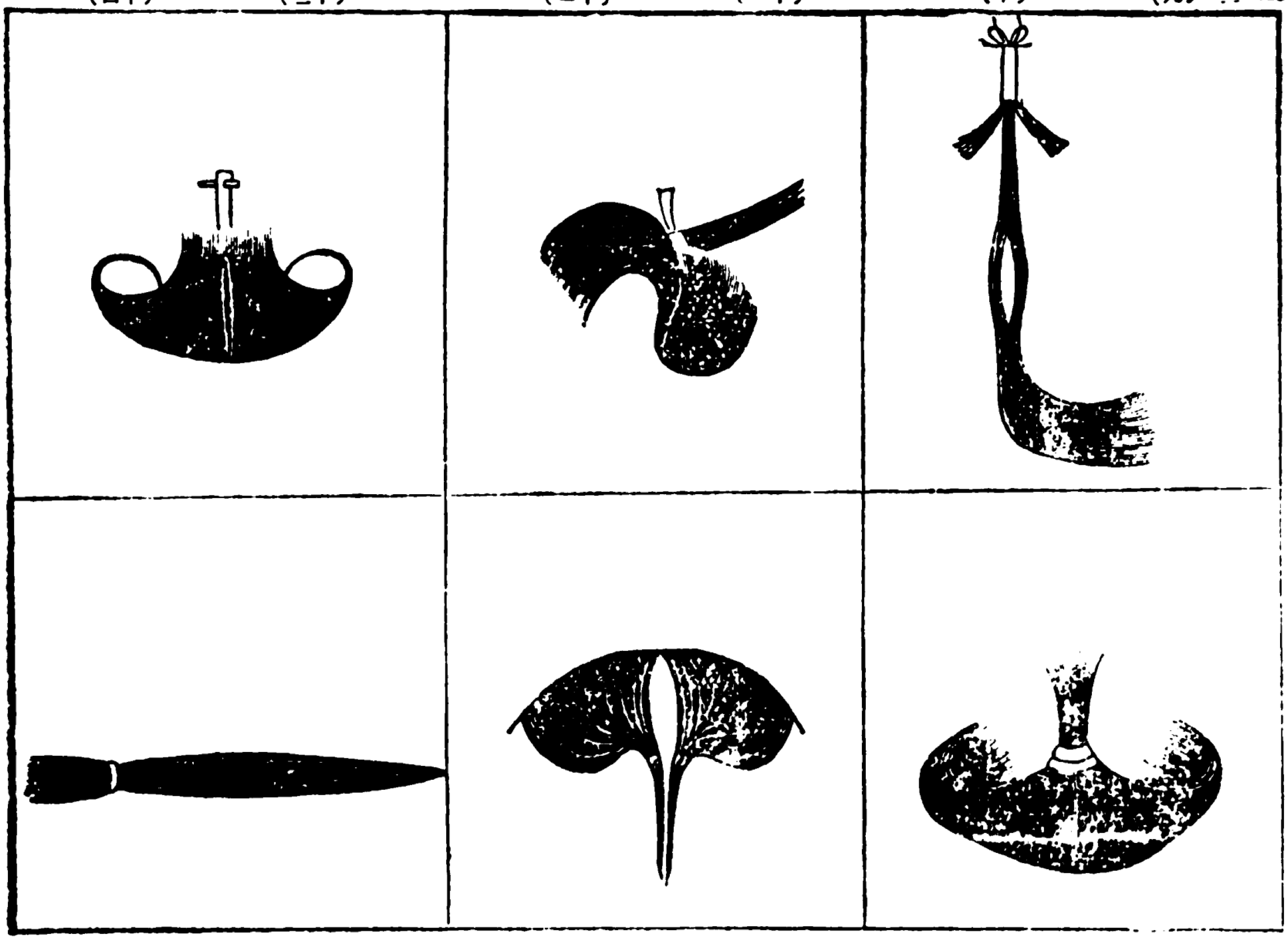


かいわりなつと　うたは
すしかうがいわげ

（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）



（九）（十）（一十）（二十）（三十）（四十）



(一)つりはけ　(二)つとうら　(三)かたびん
(四)まへがみ　(五)中つりはけ　(六)けしばん
(七)中かもじ　(八)びんみの　(九)長かもじ
(十)いれづと　(十一)びんづら　(十二)びんはり
(十三)さしつと　(十四)いかだかもじ

右作者、安部玉腕子、洛東之住人而其名、有摸スル處之雛形、篇集シ全部一冊ト成シ、普世ニ流布セン事ヲ希而已、

安永八年

(をはり)

こぼれ梅

渡部乙羽

其六

容目好き花の盛りをのみ愛づるものかは、婦人は若葉の三十一二、年数から云へど、色も香も溢るゝ程は無き頃なれど、それまでには見ぬ若化粧の一得には、剃りたる眉の痕匂やかに、染めし歯並の美くしきにも、人の目を引く山岡が女房お糸、去ぬる頃大石が計畧にて東に下り、本所松江町なる矢間が家に宿かりて、十次郎が姉なりと世間へは吹聴し、吉良の屋敷へ出入する商人などを頼みては、只管御奉公に

上らんものと、いろいろ心を粹きたる甲斐ありて、翌年如月の始め、諸鳥梢に馴れ睦む時、上野介が舘へ入込むことを得たり。

されども原宗右衛門が娘のお琴は奥勤めにして、其身は臺所廻りに働けバ、十日餘は互に相見ることもならで、お琴はまたお粂がこの屋敷に居るといふことさへ知らずに、また四五日は過ぎけり。

今日は初午祭の當日なるに、空は淸く晴れ渡りて一點の雲も無く、春風の心地好く吹き送るに、何所よりか梅の香の音信れて、夕暮よりは月のあるを一入に、千金の儲け物と、屋敷の隅の稻荷社には、參詣の老若引きも切らず。漸う童の凧を収むる刻ともなれバ、いづれも夕餐に忙しき折とて、人の足も稍々閑なるを見計らひ、吉良家の主人上野介は、黑羽二重五所紋の羽織を着流し、同じく黑の二枚襲ねを裙長にひらめかして、巾廣博多の帶に脇差のみを佩き、庭木履輕らかに踏み鳴らして、からころ〳〵と散歩く後の方に、たゞ一人附添ふは女中のお琴なり。矢飛白のお召に友染縮緬の襯衣を襲ね、緋金襴の帶を竪やの字に結びたり。鬱金縮緬の帶上げを垂れたるは、蝶も菜の花に擬ひやしぬらん、眞紅の繻袢を、庭中の黄鸝も花とや眺め





ん。髪を中高嶋田に結ひて、銀平打の釵を挿し、手には紫の服紗もて主人の太刀を捧げ持ちたり。肌の色は白くして雪に優り、容目美しくて天女の姿やこれなるべし。上野介満面喜悦の色を現はして、折ふし後邊を顧みながら。琴や何んと心地好きことではないか、斯く並びゐる地口行燈に火を照しなばまた何程か美しからう、夜に入りなむ女中共大勢と一緒に遊むうではないかと云へば、お琴は莞爾と微笑みて。ホンに御意の通りよ御座います、今日一日の面白さに、壽命の百年も生延びたやうで御座いますと、お奥でお噂を申して居りました、永の月日御奉公をいたして居ります中にも、斯うした事のありますのは、何より嬉しう存じますと、羞らふ如く打俯けバ、上野介は一入悦に入り。アハヽヽヽ、氣の輕い事を申す女ぢや、まこと奉公は氣の詰まるものでわらうな、殊さら其方位な年頃では屋敷勤めは窮屈なものぢやが、この上野介が不愍をかけて遣はせむ、泣かずに辛抱するがよいぞ、そして年齒は。はい十八歳の遲そ生れで御座います。なに十八ぢやと、屋敷へ來ずバ未だ苦勞だに知らぬ蕾が、多くの人に交はりて、雨風雪に苦しめらるゝは、さて〳〵惜しきものではあると、口の中にて獨語時、後邊よどや〳〵人の足、何事ならんと振顧

れば、お末に勤むる仲間女中の、味噌用人に眼隱しかけて、鬼事をこそするなりけれ。

今日は夜更けて寢轉ぶまで、遊戯を構ひ無しとの事より、家來は轍鮒の水に入り、籠の鳥の雲井に啼く思ひして、今鬼事の眞ッ最中ゆゑ、御前も構はず遁げ隱る、彼方の木陰に潛みては、飼犬に裾を嚙まれ、此方の垣根をぐる〲廻りて、茨に袖をからむもあり、鬼さん此方ちや手の鳴る方へと、囃子立てゝは吶と笑ふ。その一群の中よりして、遁ぐるに見せかけお琴が傍へ寄り添ふ者あり。お琴は訝かりその顏眺めて、言語やかけんとしたれども、上野介に怪しまれては一大事と、眼もて知らせば彼方も察し、此所を離れて奧庭に又も千鳥の立つ如く、ハッと散りては直に寄り、笑ひ興じて樂む中に、日ははや暮れて月出でたり。

上野介は居間に戻り、お琴は用事も果てたれど、部屋に入りて着替をなし、庭口より忍び出でゝ、以前の所に至り見れど、樹の間〲の行燈照して、火影を亂す人も無し。月はあれども葉隱れの、闇こそ好けれと忍び來る女中は山岡お粂なり。待ち設けたるお琴にも、敵地の事とて油斷せず、微けき光明を便りとして、來る人の顏

篤と見究め。お前はお粂殿ぢやないか。おうお前はお琴どの、無事で何より嬉しう御座います。妾もお前に逢ふたので、何んなに氣強うなつたか知れぬ、あアホンにこれまでの苦勞心配で、これこのやうに瘦せました。ホンに大分肉が落たさうな、そして當家の用心は何うで御座います、未だ仇討の時節は來ぬかと、十次郎樣が一方ならぬ御心痛、山科からも使者が來て、屋敷の樣子は如何ぢやと度々の申越し、それで妾も此月始め漸う此家へ入込みました、これからは二人心を協せ、屹度吉左右知らして遣りましよ、お心強うお思召せと、慰め遣れどお琴は喜び。それで妾も安堵しました、そして父さんは壯健でか。おう〳〵父さんもお丈夫、十次郎さんもお變り無うて、折ふしお前さんの噂話、お前さんの方でも夢見の好い夜は、屹度を噂の出た日ぢやぞゑ。あらまたその樣な事云うて、妾を嬉しがらせると喜び涙に暮れにけり。

文林

野郭公　　近衛忠熙

武藏野をなきて過行くほとゝぎす
はるかに聲のまたきこゆなり

夏雲　　東久世通禧

こゝろなくうき立つ雲も夏くれど
空しきそらにやまつくりけり　　鍋島直大

夕立のくものみ見ゑてふらぬ日は
いよく暑さこゝちこそすれ　　前田利嗣

さまぐに形をかへてなつの日は
空にあやしきくもぞ見ゑける　　黑田清綱

海邊子規

高砂のをのへはなれてほとゝぎす
あかしのうらの月になくなり

夏雲　　高崎正風

さみだれははれんとすらし足引の
山みえそめつくものたゑまに　　前田利鬯

けふもまたあつさしられて青空に
一むらしろきくものみゑたる

風前菖蒲　　諏訪忠元

おまへなる池にしげりてあさ風に
馨るあやめのゆかしかりける

夏雲　　黑川眞頼

あつさには雲の足もやつかるらん
行くともみえず歸るともなし　　宮地嚴夫

さしたより村雲あわぎけふもまた
夕だちすべくみゆるそらかな
小出粲

日さかりは空ふく風もたえぬらん
うかべる雲のかげもうごかず
坂正臣

夕日影てりかへしたるやまのはの
くものいろこそ暑げなりけれ
内藤存守

梅雨のあめはわかれどひよりとも
まだ定まらぬくもぞ見えける
岡部讓

夏夜

月もよし風もすゞしゝいざや兒等
すゞみがてらに螢がりせむ

夏雲

なか〳〵に日かげへだつる村雲に
風とぢられてあつきけふかな
大口鯛二

樹上郭公

都にはそらだにすぎぬほとゝぎす
木ずゑにあまたなく山路かな
藤井行麿

福島夫人のみさをめでゝ

信濃なるはゝそが原のひめまつの
みさをぞ千代のためし也ける
秦政治郎

藤原多美子

中垣のへだてにかゝるふぢなみの
はなをたもとに包むなみだか
光岡正彰

源頼朝

去はたれし蛭が小島のあまりそで
三浦千春

遂には世をもおほひけるかな

阿曇總子媛　佐々豊水

あづみのや媛がたてつる水かゞみ
光さやけしえきのかはなみ

夕螢　草野隆道

夕月のかげよりさきにあらはれて
のきばすゞしくとぶほたるかな

海邊見螢　千日亮

なには潟あしの葉風にさそはれて
波のうへにもとぶほたるかな

夏雲　鍋島榮子

ふきすさぶ風はとぢても日の影を
覆へるくもはすゞしかりけり

蜂須賀隨子

蚊遣火のけぶりの末とみるむかり
つきにかゝれるよはのうき雲

前田朗子

はるかなる山かとみしは夏の日の
空のくせなる雲にぞありける

柳原愛子

山はみなふもとになりぬ夕だちの
くものなしたる峯たかくして

國府津のやどりにてをりをりよめる　何多仁子

夜あけには程ちかゝらんわたの原
まばらになりぬ蜑のいざり火

おきつ風ふくとしだにも思はぬに
磯邊のなみのおとぞたかゝる

夏雲　小池道子

いづくより夕たつ雲のおこりけん
照日まだゆくみえしみそらに
松平　健子

うちわたす夏野のすゑの雲のみね
崩れておつるかぜぞすゞしき
鳥尾　廣子

うちわたす夏野のくさに風たちて
一むらいでしそらのうきくも
田邊　龍子

たゞならぬ雲とみしまに夕だちの
雨ははやくもこぼれきにけり
鶴　文子

日をさふる高嶺の雲のはづれより
すゞしき風もふきおちにけり

月にこそうらみもえつれ夏の日の
てる日をおほふくもぞ嬉しき
中島　歌子

螢

うなゐらが爭ふはしにそれてゆく
螢はうらのものとなりにき
尾崎すゞ子

照射

夏山のまつの火ぐしはさをしかを
やみよりやみに誘ふなりけり
安東　菊子

乞兒

やれくちしゐざり車をちからにて
乞兒は世をやめぐりゆくらん
師岡須賀子

楠公

書上鷲棲（故人　上野人）

西ふく風にみなとがは　楠の大木はかれしかど
昔ながらにつたへきて　朽ちせぬ名社殘りけれ

嵯峨野の月（下）

藍村生

峯のあらしか松風か　尋ぬる人の琴のねか
若やと思ひこゝかしこ　駒をかけよせ〳〵て
聞けどさがせど松虫の　なくより外に聲もなし
いかゞはせむと仲國は　思を砕く折りしもあれ
またもきこゆる想夫戀　糸につらさを通はせて
洩らし給ふを菊の花　なは幾千代の末かけて
わが大君の淺からぬ　露の惠をうけたまへ
猶聞れずもあるならバ　扉の前の草の上
袖をかたしき終夜　曉かけてよわり行く
虫もろともに歎かんと　眞心見ゆる月のかげ

蚊といふ事を

尾崎すゞ子

夏のよの月は、まして、さやけき物になむありける。年ふる軒に、蜘蛛のすがける糸のまに〳〵、玉をつらぬきたらむやうに、蚊といふむしのすがりたる、數さへも見ゆる計りにあんなりけり。そはともかくも、このすがりて死たる蚊は、其の蜘蛛の食ものになるなんめりと思へど、はかなさ、あはれさ、こよなしかし。

耳近くふみとなく蚊よめさむれど
くものいがきに月もかゝれり

船路の記（つゞき）

故人　藪　氏

又、もと來し道をもどりて、むかひの濱邊にゆかむやと、こゝろざし、ずさひとり、ぐして行くに、むかふより、友どちの、今、遊君のさとを見て歸るといふに出あひぬ。ともに打ちつれて、濱邊に行く。町たちつゞく程、大かた行き盡くして、東に行くほどに、濱邊に出でたり。北國の舟々も、かかりゐぬ。かの、はかひそうといふつくりにして、常の舟とはかはれり。いづれも大舟なり。夕さりかけて、火たきて底をやきぬ。それはそれにて、濱つたひ行けど、あまのいそやも、數々有りて、すさきの出でたる嶋山あり。上に、明神の社とてあり。濱邊よりのぼれど、松が根のあがりて、階のやうなるをふみ登る。拜殿、神殿あり。ぬかつきて、みたてまつれば、神はいまさず、さくめむ石なんど、いふさましたる、浪にされたる石などぞ、あなれや。

いづことも神のおましは白波や
　されたる石を殿もりにして

又くだりて、濱つたひ行くに、濱なでしこの、ひとり、色よく咲きたる、めづらしくみえぬ。もとの濱邊に出でゝ、舟に歸る。風も、漸靜になりぬれば、うれしとぞ思ふ。皆居よりて、初夜過ぐる頃まで、起き居ぬ。夜半むかりより、風しきりに吹きて、いかりおろしろへ、はし舟おろして、風をいとふ。あくるに隨ひて、しづまりぬ。

六日、ほのぼの明行く。しづかなれど、帆づなをま

きて、備後のみなとを出で丶行く。殘れる嶋々見つゝ過行く。此わたりまで、磯際清くして、潮ふかし。皆山つゞきなり。されとあり。觀世音それなりといふ。堂もみゆとて、皆人見る。藻屑かきつむるあまは、筆さし置くほど、おくれてぞみし。しばしがほどは、みえかくれしぬ。又、打ちつゞきて、山より外は、何たる所も見えぬに、ふもとと、ふもとのあはひに、人さと見ゆるあり。いづくとゝへば、たしまといふ。又、ふねのむかひに、ひとつの嶋みゆ。もゝ嶋といふ。桃のかたちにかよひて、半は青し。田嶋に田なし、桃島に桃なしと、いへりとなん。

海山のつゞくみるめに珍らしく
　たなき田島の家居をぞみる

みなもとの奥床しくも流れ來て
　ひとつうきたる沖の桃しま

西の風、しきりに吹けど、舟こぎなやみて、桃島のわたりを、こぎめぐらして、せとをこさむとて、弓削といふ所の、地かたによりて、とかくして、まぎり行けども、潮も干ぬ。思ふやうになければ、屏風をたてたるやうなる、高き山の下にかゝりて潮まちぬ。

うまくのれ見付出だしゝ桃島を
　離れもやらでこぎめぐる舟

まぎりて舟をやれど、左右さだまらず。弓削の山、ちかくのみ、たちならぶ。磯屋も多く、しほやく濱もあり。此所山みどりにして、松、かしは、よき程にしげりて、見所多し。磯の浪のあらひて、

石の、おほくそばたちたるも、みるめ深きさまなり。風は、音するばかり吹きて、空はすみまされるに。白雲の打ちはへてたてる、秋の色さやかなり。

　秋たつやそらに白雲うみのなみ

ひたとまぎりて、のぼりに見し、弓削の何がしの前を過ぐる。ふたゝび見るめも、珍しとぞおもふ。いよの松山領とかいひし。うつりかはる島山、景色おほし。もしほくむ家々もならびて、磯ぎはには、おもしろき石や、松の生ひかゝりたる所もあり。大かたは、潤白赤きいさごの、すゝれかゝりて、筋立ちたるに、さまざま生ひぬる木々の、立のはて、所々、みじかくしげりて、興あり。さし出でたる島々も、みないさごなり。あまの家居も、所々にみゆ。まぎりまぎりて、伊豫のいはぎといふ所につく。爰も家居あり。うしろに高き山あり。やまの半にも家あり。よくすみつきぬる所と見えて、みなとには、舟々かゝりぬ。白ぬりにぬりたる藏、おほければ、とまやのみなる中には、みるめとめり。しばしがほど、靜なれど、いねぶりふす。

　風淸きみなとの舟のかぢまくら
　　うさを忘るゝ波のうたゝね

七日、起々舟を出だす。けふも、同じ風の心にて、舟人つらしとわぶ。ひかたにしといふ風にて、十年に一度吹くなり。をりあしき此時に、來り逢ひしぞと、いひあへり。岩木のみなと、こぎはなれて、はなぐりのせとをこす。右も左も、立ちつゝ

く山、ひきくて、山こしに、遠山もみゆ。又、山とくのすそ、とだゑもせず、たひらかに、松のなみ木、はらはらと生ひて、千とせのみどり、わらたなり。

おきつ波こさで契りや深みどり
やまとしの中の松はら

つらき名の岩木の湊こぎ出でゝ
越るもうしやはなぐりのせと

此わひだに、がんどうの嶋といふあり。いにしへ、おそろしきものゝ、すみし所とぞいふ。

四の海おさまれるよの今も名に
たつ白波のおとのしまやま

いはがきしめて、四方の守りかたく、住居けるとみゆるなり。今は、松のみ生ひて、すさきのかたに、つゞきたるが、みるめとなりぬ。其すゑの高き所に、ちひさきほこらこそ、ひとつあれ。いかなる神を、いはひまつりしや。けふは、七夕とて、浦人も、いとまあれや、牛、おほく牽きつれてあそぶ。又、わらはとち、むれ來りて遊ぶもあり。牛をはしらせ、脊に乗りて、水中を行きかへりするも、あやふからず、さくさみぬ。

星合のゆふべをいそく手向にや
うしはに牛を洗ふあまの子

この日晝頃、餘り風あしくして、船中、たれもたれも臥し、舟も波にのりては落ち、乗りては落ちするに、皆人ゑひぬ。おもしろき嶋山も、あるらむなれど、見もやらず。星まつるべきこゝちもなし。音たてゝいよの海ふくあき風に

　つくしに歸る舟ぞたゞよふ
あきの、みたらひといふ所にあがりて、湯ろゝぎ
て、初夜過ぐころ、とまりの舟にかへりて、もの
などくひてぞ、ゆるぶこゝちのいできぬる。夜半
ばかりに、山のあなたに火あり。火はみえず、け
ぶり立ちわたり、あかくみゆ。明けてみれば、や
けぬる灰ふりてあり。
（未完）

雜報

●「おもだか」の名のおかしきなり。心あがりし
けむと思ふと」とは、女等も知らるゝ如く、清女が、
はかなきたはぶれなり。あらず、あらず。少納言
が、心をこめし、尊き訓誨なるぞかし。今の世、こ
の草の名に肖ねて、心あがりしたる人はあらじや。
男子の上は、誓言はず。男女同權などいへる、あ
られもなき僻説のはびこりしよりこのかた、父母
につゝしみ事へざる娘、夫に和ぎ順はぬ女、日に
月にまさりゆく。此等は、たゞ、ひとり、その面
を高くして、人に驕れるのみにあらず、その身を
擧げて、親と夫との上に置かむとさへするなり。
古の人は、はかなき草にさへ戒めおきつ。それ
も、形の上にはあらで、名につきていひけり。今
は、人の上の事なり。文明界の女子といへるから

に、名こそは、いとも美しけれ。その形より心に至るまで、驕りに侈りたるさま、聞くにさへむねぐるほし。あはれ、淸少納言の見なましかバ、また、いかゞはうちいづべき。猶、獨うちすまして、「おもたかの名のおかしきなり」など、知らぬさまにいひなさむか。幽微なる言の葉は、心ある者ならでは、曉り得られぬものなれど、これ、實に、醉ひ逆上たる當世女の頂門の一針なるべきぞかし。

●涼みとり　荒金の地も、照りさくるばかりの暑さ、實に晝の間は、身の置き所さへなき心地ぞすなる。夕されど、やゝ涼しうなりもていけど、池のみぎは、川のほとり、さては、青葉しげれる公園の中など、そゞろありきしつゝ、涼みとるこそ樂しけれ。さと吹き來る涼風に、晝のあつさは、いづちいにけむと思ひなさるゝは、更にもいはず。いぶせかりつる心の塵さへはらひやられて、いと淸々しうもなりゆくなりけり。されど、しどけなき樣して、心のまゝに、ひとりうちいづるは、男子の上は、さも有りぬべし。女等の夜のありきは、よく／＼、心を用ゐ給はでやは。必、ひとりは行くべからず。さりとて、親兄弟、さては、下部にもあらぬ男と共にするは惡し。まづ、大方は、父母の手とりつゝ行くがよし。ふさはしき友なくど、いかに暑かれどとて、出でゆかぬこそ、中々によけれ。かうやうなる、こちたき世話やきするも、例の吾人が老婆心に、芍藥を贈らむやうの事なかれかしと思へばなりけり。浮薄心つける、當世風の女等は、聞きいるべうもあらぬめれど。

●螢がり　これも、すゞみがてらには、こよなきすさびなるべし。されど、猶いはゞ、近からむは善し。遠くて、夜更くるまであらむは、いとあしかりなむ。また、この虫を愛づるさまよ。浮きたる心には、「忍びにもゆる胸の火」とも思はれ、「身をこがす光り」ともたぐへられぬべし。かうやうなる事は、女鑑よみ給へらむ女等の上にはあらず。女等は、かならず、此の虫を集めし昔の人を思ひおこして、いやます〳〵に、學びの業に勞かむ心をかたくし、その光りをぞ、やがて、我が身の光りとして、高き雲路に、その名をあげむことを心がけ給ふなるべし。なべて、世の、この虫をめづる人々の心の、かうやうになりゆかむ暁には、世道は、ます〳〵、明になりもてゆきつゝ、御國の光榮も、遠く輝くに至りなむ。ある人の歌、

文學ぶまどに集むる螢火も
　つもらば國のひかりあるべし

調のよしやあしやは、え知らず。意は、實に、然なりや。

●筆のたより

六月廿八日、大磯に遊ぶ。長者林の松林館のあたり、風いと涼し。

浪のおときくだにあるを松林しらべもそひて涼しかりけり

海邊を逍遙して、

こゆるぎの浪うちぎはに吾たてば暑もきえて涼しかりけり

夜に入りて、旅宿の高樓にはしゐして、

端居して身をうちよするおばしまに通ふ潮風涼しかりけり

既にして、風は絶えぬれど、月さしのぼりて、浪にうつるけしき、いはん方なし。

よる浪にくだくる月の影見れば風は吹かねど涼しかりけり

げに、涼しかりけるよ。筆もつ手に、汗あゆるこの頃、いかゞおはしますにか。世の嬢達に、心いれのみにて、身心の養ひなくば、あしかりなん。そは、御身の爲にのみはあらで、嬢達の御爲をもおもへばなり。一日二日のいとまに、身のわかすゝぎて、心うち澄まし、手力蓄へて、さて、新に筆とり給はゞ、その穂先には、世の魔物も拂はれなん。いざたまへ。浪音、松聲に、晝ゐの夢さまさせ、まち侍らんず。

大磯にて

霧の舍雨峰

女鑑編輯者よとぞ、越されたれど、返しだにえせず。

●感ずべき行　勇將のもとに弱卒なしとは、古人の確言。又善者のもとに不善者なしといふべきか。此に府下深川區猿江町に、箕田民三郎といへる人あり。元京都の人なりし故、その父祖の墓も京都にあり。今年其の故父の幾年回にか當るを以て、一家京都に行き、祭祀を行はんと、兼てより、其の費金路用まで、用意したりしが、さて京都には兄ありて、懇篤に祭典をなすといふにぞ、東京より、わざ〳〵行きてすべき要もなくなりぬ。さ

れバとて、祭祀に充つべく用意したる金を、他に支用するは本意ならず。さては、これを貧民に施與すべしといへど、女子の田鶴といふ、今年七歳になるが、これをきゝ、さらバ、わらは、日頃與へられたる錢を貯へたれバ、これをも合せて施さんといひ、又其の家に七年以前より使はるゝ下婢あり。備後國犬島の人にて、大谷きよといふが、これも、多年給料を貯へたる金あれど、加へて施さんと、幾分を出だしたり、箕田氏大に少女と下婢の志を喜び、かの祭祀料と合せて、去月十三日より三日間、米および手拭を、貧民に施與したりとぞ。今世には得難き奇特の慈善者なりや。

●海水浴　海水浴は、風俗をみだすことあらずや。男女みな裸体、さて混同して游泳すること、殆、湯屋にて、男女混合に浴するにひとし。湯屋條例を以て、湯屋の取締を嚴にして、風俗をたゞし、何ぞ海水浴の風俗をたゞさゞる。時節柄注意しおくなり。評者曰はく、夜會の舞踏は、すでに稀なり。今將に水中の舞踏さかんならんとす。蓋、男女混じて游泳するは、郎孃相携へて舞踏するにひとしと云ふなり。

餘芳

心つくし（つゞき）

税所敦子

ろのかへるさ、かのよしだりのふるさとに、あからさまに、たちよりたりしかば、おはしがほどに、いみじうあれて、其のところとも覺えず。うちみるより、まづ、なみだ、とゞまらでなん。いと、かうしも、あれはつべきこととかはと、おもふに、かたへは、過ぎしころの、大水のわざなりけり。まさごのうへも、いけのおもゝ、ひとつ草の原と、なりはてたるに、むしのね、かごとがましう。さすがに、もとあらのこはぎは、いまをさかりと、さきみだれ、ひとむらすゝきの、こゝろにまかせたるを、みるにも、手なれの駒の、あらましかばと、いとゞ、むかしの秋、おもひいでらる。つねに、ゐたりしかたを、みいれたれば、たゝみなども、みな、とりはらひたるに、なかばおちたる、かべのおもてに、なまくれと、はりおきたる、ほむぐども計りは、ありしながらの、ふでのあと、たゞいま、かきたらむに

も、かはるまじきをみるこゝち、まこと、かきくらすやうにて、あさまし。水(みづ)ぐきのあとはながれずあすか川(がは)かはりはてたるすみかなれども」。こゝのまへ、はた、まして、秋(あき)ののちとなりはてゝ、露(つゆ)のみ、地(ところ)えがほなるに、うのかみ、かりそめに、ゆひおきたりし、まがきの朝(あさ)がほは、いましも、いみじう、ひろでりて、ひと時(とき)のさかえ、おもひやらるゝに、ひとをも、花(はな)はと、ひとりでたれてなん。

もろともにおきいでゝみし朝良(あさがほ)のまがきはいまもかはらざりけり」。暮(く)れなんとするに、おどろかされて、こゝろ、あわたゞしう、たちかへりくる道(みち)すがら、さらでしもかわかぬ袖(そで)にふるさとのあさちが露(つゆ)をかけてけるな」。あうくなる人(ひと)の、春(はる)のころ、さつまより、のぼりきて、錦(にしき)のみたちに、ありけるが、いみじかりしをりも、おなじ心(こころ)に、みあつかひなど、せられしかば、いと、あたしう、うちかたらふ中(なか)とには、あらねど、なにくれのふしには、必(かならず)、たのみきこえつる

を、長月ばかり、くにゝ、くだりなんとせらるゝが、いと、心ぼそけれど、いかがはせん。そのたよりに、なきひとの、てうどども、かしこに、おくりつかはすとて、よろひ、たちなど、はこびわたすに、かの手ならしたりし、弓をとりたれば、いみじう、塵つもりて、へにける月日、思ひしらるゝに、

きみなくてひかぬゆづるの末つひにゆるぶ心をならはずもがな」。このくだりゆくひとに、

いまはよにたのむかげなくなりにけりもみぢは散りぬ君はかへりぬ」と、いひやりて、いよ〳〵、ものさびしう、ながめくらすほどに、冬にもなりぬ。神無月廿七日といふ明かたより、こゝちの、なやましう、覺えければ、月頃にもなりけるを、もし、さにもやとおもひて、さるべき人々、よびとりなど、心まうけども、するものから、いみじう、心ぼそう、この月頃の物おもひ、よのつねにしも、あらぬを、いままでは、たへて、ながらへきつれど、こたびや、よをわかるべきとて、

なるらんかと、おもふも、なにの、をしかるべき身にしもあらねど、夫のふるさとに、をさなきをゐて、くだらんまで、いましばし、ながらへまほしきぞ、なほ、つみふかき心なるや。人々も、けふは、すぎじなど、いひあつかひしかど、ことなくて、くれぬ。あくるひの、晝つかたより、いよ／＼、くるしさ、まさりければ、みな、さわぎたちて、藥をば、さらにもいはず。なにくれの、たふとものども、のませなどすれど、いさゝか、しるしもみえず。くれかたにも、なりぬれば、みもつかれはてゝ、いまは、限りにこそあらめと、おもふうちにも、すこし、ものおぼゆるひまありて、をさなきはと、とへば、となりになん、おはするといふに、たちかへり、わがありさまをみては、いかに、なきまどはん。かうながら、むなしうもならば、はゝはと、たづねんが、あはれに、かなしかるべきなど、これひとつのみ、くるしきこゝちにも、わするゝひまなし。梅宮は、かゝる時にも、いのり奉るに、必、しるしありとかや、ほのきゝたることども、おもひいで

て、にはかに、人まうでさするも、はかぐしう、あつかひ物するひとも、なければ、みづからの、心ひとつにてなん。夜中ばかりにや、からうじて、うまれたれば、すこし、いき出でたるやうなれど、さらに、うつゝとも覺えず。十日ばかりは、まくらもあがらで、つかれふしぬ。そのこにてさへ、ありつれど、いと、とみに、なくなりにけり。いつしかと、まちわたりしことの、かひなく、なりぬとおもふも、いと、いみじけれど、このほどは、みづからも、ながらふべき、こゝちにもあらねば、なか〳〵、ゆめのうつゝにてぞ、すぐしてし。こゝちの、なのめに、なりゆくまゝには、をしうも、かなしうも、おもひいでぬときのまなけれど、なにの、かひあるべきにも、あらでなん。

今はとてはすべきふしにふぢ衣かさねて袖をしぼりつる哉」。

こをおもふ道なかりせばしでの山ゆくもかへるもまどはさらまし」。

教の庭

七月五日兼題　荻風

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天

風そよぐのきばの荻のひとむらに
　あきのあはれを集めてぞきく
京都府愛宕郡上賀茂村　南大路素子

地

この秋もかぜのやどりになりに鬼
　絶江ずおとする軒の志たをぎ
廣島縣賀茂郡竹原町　千は　文子

人

こゝろなく植ゑし荻原このころは
　淋しきかぜのやどゝなりけり
三河國東加茂郡阿摺村　横山　君子

ひぐらしのなき出しより荻の葉よ
　音たてそめつあきかぜやふく
伊藤　鈴子

はしゐして月待ちをれば荻の葉に
　夕かぜきよくわたるなりけり
林　増子

かゝれとは植ゑぬものからぬき玉の
　夢おどろかすをぎのうはかぜ
佐々有鄰子

いつのよにやどりそめてか秋毎の
　あはれ身にしむをぎのうは風
千々波橘子

問ふ人もまれなるにはの夕かぜよ
　をぎのともすり淋しかりけり
小橋　幸子

まだなれぬ荻の上葉におとづれて
　秋のあはれをおくるゆふかぜ
狩野　秀子

秋風のたよりもがなときて見れど
　ころも手涼し野邊のをぎはら
河野　文子

荻の葉に吹くあさ風はあききぬと
　めにさへ見えてすゞしかり鬼
溝口　直子

身にしみて哀なりけりをぎの葉に
　おとづれそむる秋のはつかせ　藤澤　元子

さらぬだにさびしき宿の夕ぐれに
　あはれをそふる荻のうはかせ　山田　先子

さらぬだに物思ふねやの淋しきに
　いたくも吹くかをぎのうは風　高橋千代子

秋風はちぎりありてやおとづれて
　をぎの上葉にまづかよふなり　高橋　政子

秋きぬと目には視えねどわが庭の
　をぎの上葉にかせそよぐなり　尾崎　直子

秋の夜の友なきをりはことさらに
　あはれ身にしむをぎのうは風　島田　悦子

淋しさにみわたす野邊の荻の葉を
　もれて身にしむあきのゆふ風　永易　縫野

秋きぬと目にさへ見えて庭の面の
　をぎの上葉にかせそよぐなり　永易たき野

秋のきて先身にしむは野にはらに
　そよめきわたるをぎのうは風　花山やすえ

軒ちかき荻の葉わけておきかせの
　ふきしく暮はさびしかりけり　花山みさを

時ならぬ音ののきばにきこゆるは
　にはの荻むらかせわたるらん　花山きのえ

風ふかばをぎの上葉になみたちて
　よはにや夢をおどろかすらん　石井　德子

かくまでに淋しき物か小夜ふけて
　獨ねざめのをぎのうはかせ　石井　龜子

宿近くをぎだになくばあきかせも
　かく淋しくはあるまじものを　豊福みとし

われはてゝとふひともなき古里に
　そよぐも淋しをぎのうはかせ　岡本　庫子

荻の葉の末こすかせはあききぬと
　人にしられてさびしかりけり　船田りう子

秋きぬと目にはさだかに見えね共
　おとに志らるゝをぎのうは風　大亦　隆子

秋のいろはまだ見えなくに立波の
　はまをぎの葉よ風さわぐなり　中村　友子

荻の上に吹くはいかなる風なれバ
　かくもあはれは催さるらん　川井田さよ

わりなくも荻吹く風にゆめさめて
枕つゆけくなりにけるかな　江良　琴子

物おもふ夜半のねざめよ一しほの
あはれをそふる荻のうはかせ　江良　淯子

秋されば眞垣にあまる荻の葉の
末こすかぜぞたえずおとなふ　植木　鋼子

宵のまはすゞしき荻のうはかぜも
ふけゆくまゝに淋しかりけり　勝家　貞子

さまざまの憂世をかこつ秋の夜の
夢おどろかすをぎのうはかせ　勝家　良子

あはれさを誰にきけとか荻の葉に
よすがら風のうちそよぎつゝ　武智　卓能子

軒近きをぎの葉わたるゆふかぜに
さびしさまさる秋をこそしれ　武智　龍子

花すゝきまだほにいでぬ秋をさへ
おどろかしたるをぎの上かせ　津々良　一如

吹き渡る荻のはかぜにあきといふ
あはれもこもる心地こそすれ　小杉　雅枝

なべてふく秋の草木のかせながら
荻のうへこそあはれなりけれ　高橋　直子

さびしさをいかにかはせん我宿の
荻のうは葉にあきかせぞふく　眞崎　淑子

荻の葉にそよふく風になにとなく
あきのゆふべはかなしかり鳧　小杉　浪子

いつもきくあきの夕のかせなれど
荻ふくおとぞわきてさびしき　佐藤　敬子

すゞしさをまちとる爲ぞ荻の葉に
淋しきまではかせなさやぎそ　師岡　淯子

なに事もおくれし露をいとはやも
おどろかしけり荻のうはかせ　師岡　千代子

こと問はんよしもなぎさのなみ枕
荻の葉かぜのおとのみにして　內山　留子

音にきくあしべの荻にうちそよぐ
かせのねさびし秋のゆふぐれ　野尻　鷭子

ひとりねの床淋しくもなりにけり
枕にちかきをぎのうはかせ　宇多田　楊子

あはれとや人もおもはんをぎ原に
今朝音信るゝあきのはつかせ　遠藤　皆子

秋きぬといふよりやがて我かどの
　をぎふくかぜの音かはるなり　西四辻茂子

やまさとの哀はいとゞまさるらん
　荻の葉そよぐあきのはつかぜ　中村喜代井

さらでだに淋しきものを荻の葉に
　今宵もかぜのふきわたるなり　南大路正子

獨寐のよるのまくらにおとづれて
　さびしさまさるをぎのうは風　南大路芳枝

秋風のわたるあしべのゆふぐれに
　あはれをつぐる荻のともすり　松井さん子

高からぬ音こそいとゞさびしけれ
　あきかぜわたるをぎの一むら　松井たまみ

いとゞしく淋しかりけり我やどの
　荻のうは葉もかぜにそよぎて　渡邊芳子

秋の來しるしなるらん我が宿の
　荻のわか葉にかぜわたるなり　碓井信子

住の江の岸うつなみにおとそひて
　まくらにたえぬ荻のうはかぜ　碓井武子

吹く風になびく軒ものをぎのはに　安藤鍵子
　かたやまさとの秋はしるしも

荻の葉のうらうちかへし吹く風に
　あきや來ぬべし袂すゞしも　安藤義妙尼

秋風はちぎりありてや我がにはの
　をぎの上葉におとづれにけり　安藤けい子

白露はよしはらふともなつをぎの
　はなちらしそ野べのゆふ風　溝口けゐ子

身にしみて秋のあはれをそふる哉
　をぎのうはかぜ庭にふく夜は　稻田君子

さらぬだに悲しく思ふあきかぜも
　荻吹く夜半は殊にぞありける　稻田晴江

荻の葉にやどれる月はよもすがら
　かぜにゆられて影もとゞめず　稻田園子

驚きしのきものをぎのおとかへて
　あはれささそふあき風のふく　志方蟻子

さらぬだにながめ露けき夕ぐれに
　袖ふきぬらすをぎのうはかぜ　上野かね子

夕風にのきものをぎをうちなびき
　ちりしく露のながめさびしも　壬生浦子

白露のおくかたへよりみだしつゝ
荻の葉さやぎあきかせぞふく　高井よね子

七月五日兼題　萩の詞

天　府下芝區三田四國町　師岡千代子

秋の野よおり出せる千種のにしき目もあやなれと山上憶良のぬしのえらびれし七ぐさなんめでだかりけるそが中にも殊にすぐれてめでたきは萩にこそありけれ枝もたわゝに咲きたる花の夕べの露にふしたわみ朝のつゆに起もえがてなる吹風に露のしら玉打みだるゝさまのあてになつかしき手弱女のすがたにもたとへつべしやう〳〵下葉のうつろひ行く程こそ一しほあはれもまさりて覺ゆれさ男鹿のふし床とたちならすらんも心ありてなるべしさるはみやぎ野とかいはんあたりの盛の頃いかならん實に此の花の匂へる頃ぞ世の中の露けき野もしられてめでわくがるゝを心おかせ給へと露の上いひしはいかなるにかあらむ

地　千葉縣佐倉町宮小路町　植木鋼子

妾日頃萩の花を愛る心ふかゝりしにひとゝせしたしき友の許よりこは名に高きみちのくの宮城野より根分せしものとて一本を送られぬいと嬉しかりけれどやがて盆栽にものしつ二年三年ふる程よことしはとりわき去年にもいやましたけ高く枝ひろごりて今を盛りと咲出る花はさながら山姫の織なせる錦かとうたがふ斗り也けさしもとく起出て又例の花のあたりをそゞろありきしつゝ思はずも獨ごちぬなれよなれ古郷に有し頃はあまたのみやびめみやびをたちにとはれ歌にまれ詩にまれ友としめではやされしものを今ははるけき東路のいぶせき園に移し植られあるじのはかはめでくる人もなきを花の心は如何有らんされどなれぬるまゝ來る秋毎に盛りの色をましわが心をなぐさむる深きゆかりのなつかしさよたとひ千草のいろ〳〵有どとてなれを置て又仇し心をうつさんやとうちたはぶるゝに花もいとゑましげにこたへ顔してうなづく枝の末葉よりこぼるゝ露の玉とみだるゝも折から

おかしくあはれにおぼえてなん

人

長野縣長野町　勝家　貞子

秋の千草の花のいろ〳〵いづれかあはれならざらむされどその中にも一きはえんにあはれになつかしきは萩の花にこそ枝たをやかにさきみだれて玉と見るまで露のおけるさまは目もあやなりろの色の紫は雲によそへられ白きは雪に似かよひてとりどりにことなるをかし小はぎといへどましてらうたけに見えさをしかのつまとも思へバ立ちはなれがたくうづらの床のしきたへにもつきずして風になびき月にうつろひゆくけはひはその色とともに哀もふかくすてがたきをまして霜枯のまがきなどにいみじう露にみだれて咲き匂ひたるなど愛たくなつかしきさまはげに似るものなしや

佐々有鄰子

山ざとの秋はとさらにぞあはれなる尾花がそでは道ゆく人をまねきがほに女郎花はひとゝきをくねりて風になびきまがきのもとのなでしこは露おもげにさきいでたるを葛花のまつはりかゝりたるもをりからをかしうもまたねたしや藤バかまのぬぎすてられて朝顔のねくたれすがたとり〴〵しなさだめかねつるにさをしかのつまとふ聲は霧のまがきをやぶりてきこえ紫のにほへる妹みにたる萩が花妻今をさかりのけしきには種々の花のにほひもけおされていとゆかしうこそ

大亦　隆子

夕露にふししづみ朝露におきわぶる萩が花妻いとえんにちからなくかよわきさまはきぬ〴〵惜むたわやめのおもぶき見ゆる中にしひてつよからむ所のくはゝりて心のまゝに折らるべうもなき風情先いとおかしきを下葉色づく夕にはさをしかの錦のふしどゝなり露おもげなる朝にはやむごとなき雲の上人よりたきゞこる賤の少女が秋野の袖にふりかゝる涙の玉弓矢たださむますらをの心になどかあはれを覺えざらむあななつかしき小萩の花よあなあはれなる糸萩のつゆよ

藤田　濱子

已聊思ふふしありければ庵の庭に梅、蕣、萩其他樣樣の草木を植うることゝはしぬさて梅を見ては其香のかぐはしくけ高きを愛て蕣を見ては花のたをやかにして露のひぬまのはかなき命なるにも拘はらずいとにぎ／＼敷咲きいづるをめでそのほか皆それ／＼に分を乱さゞるをこそうつくしとも哀とももてはやすなりけれわきて此頃は去年植ゑにし萩の花庭の面に咲き亂れぬ巳が殊更に多く萩を植ゑしは只この花は秋の心の哀を其まゝにあらはす物ぞと思ひとりてなりけり朝夕に下葉の露の日影さしいづる頃はら／＼とちり落つる樣花のいとうつくしうて錦あやなす樣のあざやかなる水の上にかげをうつしておのづから其情のあらはれたる秋の哀ぞげにこの花にこそはあらめさて巳があらかじめ考へてし事の今はあり／＼と目の前に見えたるにいとうれしくて斯くは物せしになん

武智卓能子

あはれ今年もなかばはすぎぬひとり書よむまどの下に古歌打ち誦しなどしつゝ庭のおもかい見やればこぞの秋手栽ゑせし萩の一むらいつとなく咲き出でゝ露おもげに匂ふめり高砂のをのへの鹿やなくらむなどしのぶに何處にか笛の音のいとかすかにあはれさそふるもおかしうなむ

湯淺うの子

見わたすかぎり秋の野にさきみだれたる千ぐさの花はいづれもおとりまさりはあらじたゞまがきに匂ふ萩のはなこそ露をふくめる風情かせになやめるすが優にやさしくをかしけれ世には萩をもてたをやめになずらへあるは又なまめかしきをみなよたとふれどもこれみな文かく人のたはぶれにしていかで花の心を得べきかは露にうちふせるはやさしき心あればなりふく風になやめるはまことのみさをあれむなりされば昔の人のこの花をめでゝ七草のはじめにおきけるもげにことわりなりかし

横山きみ子

秋の野を見渡せば千草の花のいろ／＼いづれをかしからぬはあらねどわきて庭にさきつる小萩の花

むかりいみじうゆかしきものはあらずかしそはおのが方に引くこゝろならめど枝ながら見る朝露にながきをかこちしねざめをなぐさめ池水にさしそふ夕月に玉川の邊なる浪をおもひやりはた古りにふりて朽つる斗りなる草の庵の軒ぞまで一面ににしきかけたらむやうに咲き出でたるさまざえなき身には大和言の葉はにほはねど大和にしきはきるべうもあらぬこゝちしていと〳〵ゆかしうをかしくなむ

宇多田揚子

庭の面枝葉重げに置ろふ露に今を盛と咲きみだれたる萩の花はげにから錦の上に玉を敷けるやうよて其の美しさえもいはれねど春の花などながむるとは何となくことかはりて優にやさしくなつかしくなむ覺ゆつるそは秋のよろづ物靜にしてあはれもいと深かるにや依るならむ

松井つる子

心つくしの秋立ちくれば物ごとにあはれなるにまはぎ原おく白露とさきみだれかをれる玉に月の光をとめ下葉色つき錦おりそめつゝ虫の音をやどすなど人の心を慰めてかくばかりめでたきものはあらずなん

松井さん子

萩の上風身にしみてはそゞろ心つくしの秋を覺ゆれど下葉色つき錦を織りてはいとゞ秋の思ひを慰め小雨そゝぐ夜虫の音をやどす夕などはこよなうあはれなれどかをれる露の玉を結びさやけき月の光をやどすなどえもいはずおかしあはれ秋萩ほどめでたきもなくあはれなるもなからん亦心つくしの種となり慰みの種となるものもなからん

安藤鍵子

野邊の千草のいろ〳〵咲出るが中にこれはしもとまづとりいでらるゝは萩にこそあなれ秋の初風やう〳〵おとづれてよりかづ〳〵咲き出であるは名たゝる廣き野末よりあるは所せき庭にいたるまですくなくも多きもほどにつけ處得がほに匂ふさまねんにもはたうるはしく人招くてふ尾花なつかしといふ女郎花さては藤袴撫子など一ふしはあはれ

なるも猶くらべがたかるべし秋霧ふかくこめたる朝には花の匂ひも一入にて錦とやいはん白露いたくおき渡せる夕には月を宿して玉とかせんげにしにかきておとり言にあげてつきせぬてふはかゝる上をやいふらんかしされバこそ此花をして千草にもすぐれ七草のうちにもまさるとはいふなれあはれなつかしのこの色やあはれしぬべしのこのさまや

福島中佐のいさををめでゝ

外國にたけきこゝろを示しおきて　片岡　象代
かへるは君がいさをなりけり

國の爲つくすこゝろはたふとしな　片岡　照子
よろづ代までに名をゝ殘して

日の本の富士より高きいさをしは　高橋やえ子
とつ國までもしるけかりけり

ふく島の君がいさをのかせのまに　中川　新子
靡かぬさとはあらじとぞ思ふ

國のため君がためとてとつくにに　工藤　政子

たてしいさをはしるけかりけり

くにのため君が爲とてふくしまの　松原　京子
風になびかぬくさきあらじを

ふく島の君がいさをのかせのねは　山本千代子
至らぬくまもあらじとぞ思ふ

こゝろなき草木もなびくふく島の　西田たか子
君がいさをのかせのまに〳〵

丈夫のかゞみを問はゞ千代ふとも　加藤きみ子
わが日の本にありとこたへむ

のる駒のひづめは雪にうもるれど　楢山　柳子
高きその名はあらはれにけり

世の中にためしさへなき君の名の　佐野　富子
たかきにたぐふ山もあらじな

音高きひまらやだけもあすよりは　本間　操子
きみがあぶみのふもとなりけり

外國のあをひとぐさもなびくなり　波岡　島子
こまうつむちの音のまに〳〵

ひまらやもけおされにけり久方の　小出　悌子
雲井にたかききみがいさをに

福島夫人の操をめでゝ

おとにきくきみがほまれも高砂の　まつ操こそたふとかりけれ　相羽　政子

ときはなるまつ操こそはるの野の　色わかくさのかゞみなりけれ　松原　京子

常盤なるまつの操は世々をへて　こずゑに高くのこりこそすれ　大崎　米子

千よろづの草木はあれど常盤なる　まつ操こそたふとかりけれ　加藤　君子

兼題

七月廿日
- 歌……月前筏
- 文……殘暑を見舞ふ消息

八月五日
- 歌……旅宿鹿
- 文……學問は何の爲にするか

其の女、世人にはまさりけり。其の人、かたちよりは、こゝろなん、まさりたりける。

（伊勢物語）

國光は忠孝節義の士氣を激勵し固有の美風良俗を扶植し以て邦家進取興隆の基礎を鞏固にし殖産軍備教育の法廣く宇內の秀美を蒐め富強の策を講するを務とす其時事を評し活勢を論するに當りては公平の眼を以て大局の上より國家の利害を觀察し太古に溯り萬世に亘り時流を趁はす世好に投せす卓然獨立正言公議眞理中道を得以て國光を世界に服被するを旨とす

國光

每月二回發行
十日廿五日
一册代金拾三錢
但全國無遞送料

國光第六卷第五號目錄

發行所
麴町區平川町五丁目
國光社

（明治二十四年八月八日内務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麴町郵便局へ御振込可被下事○郵便劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し強て領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月二回五日廿日發行

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金十五錢

明治廿六年七月四日印刷
同　年同月五日發行

東京麴町區平川町六丁目十二番地
發行兼印刷人　川崎直衛

東京麴町區平川町五丁目十六番地
編輯人　同　山根勇藏

發行所　國光社

（赤坂區赤坂田町二丁目十五番地國光社印刷部印行）